
次元戦士エクセリオン

宇宙ひらめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次元戦士エクセリヲン

【Nコード】

N0955X

【作者名】

宇宙ひらめ

【あらすじ】

自称・平凡な私立聖祥大学付属高校の一年生”高町レイジ”どこか単調な毎日に退屈を感じていた…そんなある日、赤い宝石を手に入れる。彼はその日を境に非日常の世界に踏み込んでいく。ある日、不穏なものを感じながらも、それを迎えるべく家を出るレイジ。それが、後にある出来事の幕開けだった。

次元戦士エクセリヲン

これは、平行世界の海鳴市のもう一つの物語である。

最初に・注意書き

はじめに・注意書き

ひらめの駄作製造所へようこそ。

以下の注意点参照。いろいろ注意して、お読みください。

- ・ この作品はスーパー戦隊35周年&仮面ライダー40周年を記念して、魔法少女シリーズ作品をメタルヒーローにリメイクした作品です。
- ・ 作者は中二病を患っています。
- ・ 他作品同様、独自解釈、独自設定アリです。作者の勘違い、公式設定等を教えていただけるのは大歓迎です。ですがそれでお話を修正するかという程度によります。修正がない場合はこのSSの仕様です。
- ・ これは昔(2011/3/6)に投稿したヒーロー戦記内で展開していた”エクセリオン編”を連載にしたものです。
- ・ バトル以外にも暴力描写あります。出来るだけ薄めるので年齢制限はかけません。

では宜しければ、お付き合いよろしく願います。

追記、物書きドベです。誤字脱字があれば教えてください。

S t · s · i 海鳴市の少年

「……………」

栗色、短髪の少年は夢を見ていた…、

「君は力が欲しいのか……………」

「え……………」

急いで振り向くと、——3人の女性が立っていた……。その3人の姿は1人は白い服を着て髪型が栗色のサイドテールの女性、2人目はショートヘアーの茶髪に髪留めをしている女性、3人目は黒い服に裏地が赤の黒いマントを羽織った金髪の女性、その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分にしか見えない。

「力を欲しい…？ 何のために……………」

「——ん？ あー…よくわかんね…そうだな。みんなを守る…………いや、それって当たり前のことかもな…」

「みんなを……………」

女性の言葉に、少年はまた考える。自分の命を優先に人を守ることなど、考えられることではない。彼にとってはそんなことが思い浮かばないのが正しい。だが彼は理解した。

短髪の少年は目を覚まし、時計を見る。朝の7時。彼は窓を開けた

……

「急に風が強くなったな。」

目が覚めると、まだ意識が覚醒していないのだが、今日は何やら身体中に冷や汗をかいていた。

「んっ？」

彼は振り返った。すると、目の前に何かが落ちていた。
拾い上げて周囲を見渡した。

「・・・紅い宝石？」

それは、赤色でシンプルな宝石だった。もう一度、辺りを見回した
が人影は無かった。

「ビーダマ？…にしてはデカすぎるな・・・何の宝石だ？」

少年は不思議そうに宝石を見ていた。

・・・彼 ” 高町レイジ ” はこれから起こる何かを感じながら。

” 私立聖祥大学付属高校 1 - B 教室 ”

「おはようございます」

「「「「おはようございます」「」「」

今は朝のホームルーム。まだ教師は話を続けている。

「・・・というわけで今日は1時限目から移動教室となります。必要なものだけでもって、さっさと移動しましょう。」

――数時間後 昼

「やっと、昼か？」

午前中の授業は全部、聞き流していたレイジ。

「よっ、高町レイジ！！！」

「おう、中島ホクト。」

今、挨拶したのは「中島ホクト」レイジの同級生で同じクラス。格闘技ヲタクで、特撮ヒーロー、アニメヲタクだ。

「聞いたか？レイジ。」

「何を？」

ホクトがきくと、

「”メタルヒーロー”だよ！」

「おい、またその話かよ……」

「いいだろ別に！」

またかよ……。と思うレイジだった

そして更に数時間後…

同場所 1 - B 教室 放課後 16:15

「以上が連絡事項だ、週末で遊びに行く時は何人が友達を連れて行動するように！以上！！」

「起立！、礼！、解散！！」

学級委員長がそう言った後、クラス全員は教室から出て行った…

とある通り

「じゃあなレイジ、また学校でな。」

「おう、また学校で。」

レイジはふらふらになりながら帰宅する。

「ただいま、母さん。」

帰ってきて、玄関で靴を脱いで上がったばかりなのにも関わらず、

「お帰りなさい。ねえレイジくん、御使いにいつて来てくれる？…
ハイ！これ、チラシね！」

・ 翠屋の店長にしてレイジの母、高町 なのはに御使いを頼まれた・

「・・・わかったよ。いつてきます！間に合ってくれよタイムセー
ル！！」

どこぞの特撮ヒーローの様に、レイジはスーパーへと走っていた。

「ん？ 誰だろ」

レイジが出た後、母はFAX機能を持った留守番電話機のランプ
が光っていることに気付いた。点滅する再生ボタンを押すと合成音
声が録音された日時と件数を告げ、メッセージが流れた。

『ああ、うん……俺だ、母さん、レイジ！元気か？』

「この声は、士郎君ね？」

発信者は高町家の長男”士郎”だった。

『今月は仕事が忙しくて、次に帰るのは来月になると思う』

レイジの母がカレンダーを見ると、まだあと半月ほど残っている。

『母さんとレイジなら大丈夫だと思うけど、何かあったらオレの携

携帯電話に連絡を入れてくれ。』

本当は職場の連絡先も知りたかった様だが、なぜだか教えてはくれない。レイジは気にしてなかったが・・・両親は困ったみたいだ。

『まったく、仕事仕事と息子らしいことも兄貴らしいことを口くにしてないな。みんながしっかりしているからこそなんとかなるんだけど……。』

「そんなことはないよ、土郎君が居たからこそレイジ君は頑張れるんだよ。」

と母、

『最後になるが・・・レイジ、帰ったら久しぶりに特訓だ。』

メッセージはそこで終わった。

次の日…

教室は今日入ってくる編入生の話で持ちきりだ。

「おい、レイジ」

「何だ、ホクト？」

「今日って編入生が入ってくるって聞いているけど少し遅すぎないか？」

悪友のホクトはレイジに聞いてみた。

「そうだな、大方初日のお前みたいに寝坊か何かだろうな。編入生の事が気になるのは分かるけど、それで足元をすくわれなよ。」

「分かってるよ！」

ホクトがそういった時、クラスのドアが開き担任先生と一緒に知らぬ生徒が入ってくる。

「全員揃ってますね。これよりHRを始めます。」

黒板の前で可愛く笑うのは担任の”虹原いんく先生”。

大人なのだが、とてもそうは見えない口リ体型。どこでも小学生と間違われる感を醸し出しているが、左手をよく見ると、薬指に指輪がはまっている（驚）。

「はい。それではスクライア君、自己紹介をしてください。」

「はじめまして。シャルル・スクライアです。気軽にシャルルと呼んでください。」

趣味は読書、特技というほどでは無いですが、学問と家事全般がそれなりに出来ます。よろしくお願いします。」

クラスメート（女）全員がキヤーキヤーうるさい。

「皆さん、よろしくお願いします！」

『はいつ！』

主に女子が中心となって元気な返事。そんな中、彼は心の中でこれまでの出来事を考えていた。

「高町くん？」

「あ、すいません。えー……えっと、はい。」

呼ばれたレイジはを見るようにして頭を下げた。「それより、いんく先生の声が自身の母と声が似ているようなの？」

「次、ル・ルシエさん」

数分後：

自己紹介が終わると、いんく先生は脚立の上にたった。

あれで背伸びまでしてるんだから、バランスは大丈夫なのか？とクラス全員が見守る。

「はいはい、皆さん！！まだうちのクラスは他校との合同『学園祭』の出し物が何一つ決まっていなから！！朝のHR^{ホームルーム}を使って決めてもらいますよ！！ということでバニングスさん、お願いしますー」

「わかりました」

ガタリ、と音を立てながら立ち上がる学級委員長「バニングス」。

「みんな！！うちの学校でまだ決まっていなのはこのクラスだけなのよ！？何か案がある人！！」

そういうとバニングスは黒板に、『教室での出し物』『舞台の出し物（クラス全員）』『舞台の出し物（少数ずつ）』と書いていく。

すると、ホクトが手をあげた。

「俺は、メイドを始め・・・あらゆる属性の女の子を出す喫茶店がいいと思いま・・・アベシツ！！？」

バニングスのチョークがホクトの脳天にグレートゲキレツアタックする！

「今度言ったら、風穴開けるわよ！！次！！」

しかも華麗にとぼす。と、こんな具合で進んで、教室での出し物は『喫茶店』になり、

担任に促され適当に席に着きHRを終えた。

それから数時間後…放課後 16:15

「あゝ疲れた」

このクラス……、本当に疲れそうだ……と思う、レイジ。

「レイジ、帰ろうぜ」

ホクトが俺に呼びかけてきた。幼稚園からの友人と言うより、もはや腐れ縁だ。

時刻は夕方、

学校を終えたレイジはおつかいをすませて、いつも通りの道を通り自宅へと向かっていた
特に何も変わりは無く自宅へと向かっていたすると、

（……君のデバイスはどこだい？）

「あ？」

ふと、何処からか声が聞こえた、声からして少年のようであった

「……やっぱり、君が持ってたか。」

「!? お前は、確か・・・転校生の”スクライア”か」

「シャルルでいいよ。ちょっと、いいかな？」

レイジの後ろには、転校生のシャルル・スクライアがいた

「・・・まあ、寄り道するつもりだったからいいぜ。」

1人呟いてレイジは彼の話聞きながら、何時も通る道とは違った道を進んだ。

レイジとシャルルは公園のベンチに座り込んでいた

「・・・へえ、この”赤い宝石”お前のか？」

レイジは立ち上がり

「・・・ほらよ、返す。」

「いや、それはもうレイジ君をマスターとして選んだから・・・君にしか使えないようにプロテクトがかかってるんだ。」

レイジは驚いた

「ふえー、随分ハイテクなビードマだな？」

「・・・ビードマじゃないってば。」

「ま、いいさ・・・一応、貰っとく。」

帰宅しようとした、その時・・・。

—キイイイインツ—

「ッ?! な、なんだ?!」

突然、妙な感覚とキイインという耳障りな音が、レイジを襲った。

ドガアアアアン!!!

突如向こうの方から爆発音が響いた。それを聞いた途端、周りにいた人々を取り乱しながら音と逆方向へ急いで逃げ出す。

……カッ!……

建物に何かに気づいてとある方向を指差す。歩行者がその方向を見ると、其処には建物の壁をぶち抜き、真っ赤に爛々と光る目を持った得体の知れない怪物がでてくる光景があつた。

「なんだ!? あの生物は!？」
ナマモノ

レイジはその光景を唾然として見るが、化け物達は突然次々と爆発を起こし、辺り一面を火の海に変えていく。

「やっぱ!」

「と、とりあえずどうしよう?」

怪物は壁の破片を撒き散らし、不気味な唸り声を上げながら、弾丸じみた動きでレイジ達を追う。

「いったん逃げよう!」

「いや、こういうモンに限って背中を見せると何か・・・あぶねえッ!」

そうしている内に動き出した怪物が腕のニードルで攻撃、レイジはシャルルを押し、自分もニードルをかわす。

「・・・っ、悪い。大丈夫か?」

「...平気。それよりも・・・!?!」

その時、不思議な事が起こった・・・レイジの服のポケットが光りはじめる、彼は取り出した『紅い宝石』を自分の前にかざす。

「!?! 光ってる・・・。」

《stand by ready》

『紅い宝石』は粒子化し、レイジの携帯電話に吸い込まれるよう入っていった。

「…俺の携帯！？…」

彼の”旧式の携帯電話”がメカニカルな携帯電話型ツールに変化する、

(…彼には資質がある…よし！)

シャルルは頷いて、

「レイジ君、セットアップだ！」

「ちょっと待てって！？」

突然の事だが彼は…

「なんだか、解からないけど…ん？」

このツールの使い方が脳裏に浮かんた。

(こっか・・・?)

レイジは携帯を開くと、素早く『CVK792-A』+エンターの順にキーを押した・・・すると急に光りだす。

《sealing mode》

(…確か、こっか…?)

折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫ぶ!

「セットアップ!」

《set up》

体にコンバットスーツが装着。

「何だこれ、姿が変わった!？」

「次元戦士エクセリオン」…… コンバットスーツをセットアップするタイムは、わずか0・05秒に過ぎない…… では、セットアッププロセスをもう1度見てみよう……

「セットアップ!」

《set up》

「セットアップ」——それは 高町レイジが力を発現させ、”先ほど変わったレイジの携帯”に圧縮されている、微粒子状に分解された桜色、黒、金色の”フィン形特殊軽合金”が体に吹き付けられ

るようにスーツを構成していき、”次元戦士エクセリオン”となる現象である……

羽飾りのついた仮面、ベルトの腰に本の形をしたツール、レイジが小学生の時に着ていた、聖祥大付属小学校制服のデザインに似たボディ、胸部の所に金属パーツが装飾され…腕、腰の部分に青いラインが入っており、青いレッグには赤いラインが入っていた。

そうこうしている内に・・・怪物が、変身したレイジ・・・”エクセリオン”に向かって戦闘態勢を整え、上空に飛び上がった。

一気に攻撃対象と見られたエクセリオン目掛けて落ちて来る。まるで巨大な鉄球の様だ。

「来るよ！」

——ウオオオオオオッ！——

シャルルは、目の前で茫然としているエクセリオンに向かって叫んだ。

エクセリオンが怪物に挑む。

怪物がエクセリオン目掛けて突進する！

「破あつ！！！！」

反射的にエクセリオンが拳を振るって殴りつけ、投げ飛ばす。

「これが……　これが俺の力？」

自分の力に驚くエクセリオンの隙をつき、怪物の攻撃が炸裂。

「チッ！　油断した！」

怪物がエクセリオンを捕え、自分ごと空間に飛ばす。

——この怪物は地軸を操ることができ、ブラックホールによく似た魔空空間を作りだすことができるのだ！」

怪物の長い腕を振りほどき、蹴りが炸裂する。

距離をとり、彼は啞然としていた。

怪物は爆発した様に飛び散ったが、みるみるうちに元の姿に集まって行く。

「自己再生？」

するといろんな所から障害物が迫ってくる。

「このっ!!」

エクセリオンのパンチが障害物を破壊。

「行くぞ！ はあっ!!」

怪物がエクセリオンを翻弄。

今度は緑の炎が吹き出す。

「あぶねえッ!!」

すると今度は怪物が迫ってくる。

「やっぱり、コイツ再生してやがる!!」

——この怪物は、魔空エネルギーを得て、地上の3倍のパワーを持つことができるのだ！

元の姿に戻った怪物は唸り声を上げ、体に生えている触手を弾丸の様に繰り出して来た。その時、シャルルの念話が聞こえる。

『レイジ君！何でもいいから、魔法を「はあ！？馬鹿言え、俺が使えるわk・・・」いいから!』

すると彼は別の空間に飛ばされ、怪物の猛攻に苦戦する。

相手を突き飛ばし、距離をとると・・・複眼が発光し、情報が投影される。

「フラッシュインパクト？……やってみるか！」

エクセリオンは怪物の攻撃を、両手で受け止めた。

腕にエネルギーが伝達され、フィンが展開。桜色、黄、黒のフィンが現れ、発光した。エクセリオンは体制を低くし構えた。

エクセリオンと怪物が格闘を繰り広げる。

「ん？何だかわからないが……腕に力が漲ってくる。」

強烈な光が輝く……両手に集中し出し、彼の力を溜めていく。

『フラッシュインパクト！！』

フラッシュインパクトが炸裂。

桜色のエネルギーを纏った光の拳で怪物の体を貫く。

ギエエエツ！！！！

一閃と共に、怪物の体にぽっかりと風穴が開き、爆発四散。光の粒子となり、跡形も無く崩れ去った。

「なんだか、面倒事に巻き込まれたな……。」

魔空間も消え、元の世界に戻る。

——かくして、次元戦士エクセリオン……謎の未確認生命体との、熾烈な戦いの幕が切って落とされた。セットアップせよ、次元戦士エクセリオン！

つづく

St・s・2 その名はエクセリオン！

私立聖祥大学付属高校 1 - B 教室

「はああ……」

なんだか午前中は、授業が耳に入ってこなかった。
レイジは集中しようとしても、頭のどこかでこれまでの事がグルグル回ってしまっている。

「うつうつ……」

彼は思わず机に突っ伏すと、完全に呆けてしまっていた。そんな彼の所に悪友が寄って来る。

「どうしたんだ？ レイジ」

「ん〜？」

「やっぱ、気を遣いすぎて疲れたか？」

「あ〜」（駄目だ、全然言葉が出てこない。もうちょっと愛想よくしたいんだけど、完全にガス欠状態だ。）

「おいおい、本当にどうしたんだよ」

悪友も心配する。

「いや、なんでもないよ。気疲れしただけかもな。」

「はははっ、『最強の男』の息子も流石にぐったりか？」

「…ここで、それは言うなって…だりい。」

「しっかりしろよ、おい」

ここで、彼は1つ疑問に思う。

「ああ、ありがと。」（でも、待てよ。昨日あれだけの事があったのに、そんなに表だって噂とかになってないな。）

「で、疲れてるところなんだけど、レイジ、お前昼飯どつするんだ？」

「あっ、そうか。もう昼か？」

時計に目をやると12:00を回っていた。

「どつりで、腹減ってる訳だ。」

「どこまでボケボケだよ、レイジ？」

「悪い……確か母さんの弁当が…。」

「そついえば、「おばさん」の作る飯美味いんだよな？」

「お前、母さん本人の前で「おばさん」って言ったら怒られるぞ。」

母、本人曰く”永遠の17歳”

「ははっ、ワリイ。」

「…さて、屋上で食うか。」

そういうと、レイジは屋上へと向かった。

「えっ…?」

「あっ、高町…レイジ君?」

振り返ると、そこには少女の姿があった。

「えーと、”風斬・テストロッサ・アリシア”…だったっけ?」

「うん…でも…アリシアでいいよ。」

クラスでは、姫、天使、女神等と言われている”風斬・テストロッサ・アリシア”だ

「じゃあ、俺もレイジでいいよ…っていうか、俺の名前知ってるんだ?」

「えっ、うん、まあ生徒会長だから…」

あまりの説得力のない答えに彼は思わず突っ込みを入れてしまう。

「…その生徒会長様は、全校生徒の名前を覚えているのか?」

「うん…そう。」

そんな事いった割には、彼女の目は泳いでいた。

「それより、レイジ君。お昼食べた？」

「あ？いや、まだ手に持ってるけど…どうかしたのか？」

彼女の手にはレイジの弁当箱と同じくらいの大きさのランチボックスが、

「屋上で一緒に食べる？」

「別にいいけど…」

「よかった。」

流石に断る理由がなかったのか、レイジはアリシアと学校の屋上へと上がっていった。

私立聖祥大学付属高校 屋上

屋上は涼しい風が吹いていて、ロケーションも最高である、アリシアは持参したランチボックスを黙々と食べていた。

「それにしても、静かだな。」

「美味しそうね…」

レイジがお昼を食べ始めると、アリシアはまず、そこに食いついてきた。

「翠屋…知ってるだろ？俺の親はその店主だ。」

「あつ、そ、そうなんだ…」

そう言う「なんだか妙に気まずい」と思っていた彼は辺りを見回してみる…だが、二人以外の人影はなく異常なほど静かである。

「食った食った…さて、教室に戻るか…。」

「…ご馳走さま。」

その時だった。

ヒュンッ！

「危ないッ。」

「キヤアッ…。」

異形の姿をした緑色の未確認生命体が現れる。

『……早く二確實二済マセマス』

アリシアが異形の姿を見て後退り。

TVでも、学校でも、未確認生命体には要注意といわれているため、用心している様子。それでも、この異形の姿だ。一人の少女が見てしまえば後退りする気持ちも分からないわけでもない。

「クラールヴィント。導ケ！」

指の飾りが振り子型へと変形してアリシアに向けてはなってきた。

「きゃあああああああ！！！」

逃げ遅れたアリシアは、そのまま振り子による攻撃を…

「セットアップ！」

《set up》

キンッ！

・・・当たる前に防いだ。

「ナニ！？」

振り子攻撃を妨げるエクセリオン。

「キサマハ！？」

レイジがエクセリオンにセットアップ。

「次元戦士エクセリオン！！」

―次元戦士エクセリオンは、わずか0・05秒でセツトアップを完了する。ではその原理を測定しよう…… 次元戦士エクセリオンは、微粒子状に分解された3色の”フィン形特殊軽合金”を浴びて、わずか0・05秒で、セツトアップを完了するのだ！」

「そら！」

攻撃を防いだその拳が振り子を弾き飛ばした。

「ぐあ！」

反動で転げまわる未確認生命体。

「あ……レイジ君？その格好は……」

少女の前に立ちはだかるエクセリオンの姿。

緑の生命体の攻撃をかわし、アリシアの方を見る。

「アリシア！…ん？」

彼女の後ろに”女性の姿”が一瞬だけ見えた、その時だった…複眼が発光し、情報が投影される。

「『Aggressor Mode』…、なんだこれ？」

すると、さらに情報が浮かび上がっていき、黒い文字で『Aggr

essor Mode』と書かれていた・・・そして、エクセリオンは彼女の問いに、

「気にするな、只の”コスプレ”だ。」

「え？え？」

いきなり現れた白騎士の姿に、少女は戸惑いを隠せない。

「とにかく、今のうちに逃げろ。コイツは俺が引き受ける！」

「でも・・・」

少女は一度未確認生命体の異形の姿を確認する。

おぞましいその姿・・・アリシアは身震いし。

「ごめんなさい！」

その場から立ち上がると急いでその場を後にした。

「空間に……引キズリ込ンデヤル！！」

―この未確認生命体は、地軸を操ることができ、ブラックホールによく似た魔空空間を作りだすことができるのだ！

するとエクセリオンは別の空間に飛ばされる。

内部が揺れ、エクセリオンはバランスを崩す。

「ククク、我々ハコノ空間で、3倍ノパワーヲ持ツコトガデキルノ
ダ……」

未確認生命体の猛攻に苦戦するエクセリオン。

「フン！」

「な、何っ！？手品か何かか！？」

エクセリオンは自分の背後から出ている”それ”を見て驚きを隠せない。

「マダダッ！」

エクセリオンが見て驚いている”それ”とは……。
未確認生命体の腕だった。

緑の未確認生命体は、緑色の空間に左手を突っ込んでいた。
一旦抜いてからもう一度左手を突っ込む。

「チッ、面倒なやつだ！」

エクセリオンは拳を強く握り締めていた。

携帯型ツールへCVK792-Rと入力する。

「……お前らが3倍なら……こっちは4倍だ！」

《Aggressor Mode!!》

エンターを押すと、コンバットスーツのカラーリングがネイビーブルーとブラックにかわる・・・そして、左腰に携行されるI P A D型の専用ツール。”リインブッカー”を取り出しソードモードに切り替える。

《D a g g e r B l a d e !》

電子音声が響くと、刃にバリア貫通能力を付加し、同時に刃部分を強化。

「…ダガーブレード！」

電子音と共に強化された刃は鋼鉄をも容易く切り裂く威力に。

「はあっ!!！」

エクセリオンは地面を蹴り上げ、高速移動をしながら未確認生命体にリインブッカーを振るう。

緑の生命体「!？」

未確認生命体はエクセリオンの攻撃を、振り子でその刃で防ぐ。エクセリオンはリインブッカーを右手だけで持ち、左手を未確認生命体の前に出す。その左手に球体の波動弾が電撃を纏いながら形成されていく。

「ストレイトバスタ——！！」

形成された魔力弾、超近距離で直射砲が未確認生命体に放たれた。

リインブッカーを防いでいた未確認生命体は避けることも出来ず直射砲をその胸に撃ち抜かれる。

「グアあああ！！」

直撃を受け、未確認生命体の胸から火花が激しく散り、爆発し濁った宝石が弾け飛んだ。

エクセリオンが現実世界に戻る。

未確認生命体が消滅した跡に、そこには青く輝く『宝石』があった。

「な…なんだ…これ？」

気になったエクセリオンは何気なく拾おうと手を伸ばそうとした、その時だった。

「待って！駄目だよ！」

違和感に気づき、駆けつけてきたシャルルが注意するが、言うてる間にエクセリオンは、宝石に触れたが・・・何ともなかった。

「ッ！なんで、何ともないの？」

「さあな、処で・・・コイツはなんだ？」

「『ロストログア』・・・これは、『ジュエルシード』かな？多分、リインブッカーを使えば、回収できるよ。」

「OK、こうか？」

エクセリオンは宝石のほうへリインブッカーを向けた。

《Samm lung . 》

すると、光り輝く宝石のようなものがリインブッカーへと吸い込まれていった。

「……へえ」

その一部始終を目の当たりにしたエクセリオンは啞然としていた。

非現実的は慣れているが、ちょっと、面白い光景だったからだ。

「こんな感じで町内の平和を守る……って、俺のガラじゃないな。」

変身するとき、ため息をつくレイジ。

「ハハハ……」

この日からレイジの『ロストロギア』集めが始まったのである。

S t · s · 3 封・印・解・除 〈 r e l e a s e 〉

数年前、とある世界・・・。

「本日より三週間、君達の空戦教導を担当することになった。ちょっとハードな訓練になると思うがしっかりとついて来いよ」

「はい！」

戦技教導官、そして空戦魔導師の男は、今日も後進を守り、育て続ける

「さあて、それじゃ元気に頑張っていくか！」

一同「はい！」

それから、3年後。

「シャルル！」

その日……………時空管理局のとある通路を
親友の名を叫びながら1人の少年が走っていた

「……………どうしたの？フェルト……………」

フェルトの叫び声に足を止め彼の方を振り向いた少年はシャルルつい先程までフェルトと同じく時空管理局の魔導師『だった』

「局を辞めるってどういう事だ!？」

シャルルの元に駆け寄ったフェルトは現実が信じられないという顔をしていた

「……」プロト・レイジング・ハート”……知ってるでしょ？」

「……何があつたんだ……?」

彼はシャルルの胸元を掴み訳が分からないという顔で叫ぶ

「……僕は星光の遺跡の中で”プロト・レイジング・ハート”を發見して局に保管して貰ったんだけど、運んでいた時空間船が事故か何らかの人為的災害に会ってしまつて……。」

「……そんなの……お前が悪くないだろ……」

「行つて来る。」

彼はフェルトの手をほどくと、目の前にあつた扉を開け歩き出した

「待て！シャルル！！」

「じゃあね…フェルト…」

フェルトの言葉を断ち切る様にシャルルが通過した
扉は閉じたのだった

「……さて…別れを言う人は彼だけ…？もう1人居たな…行く」

立ち止まって少し考え事をしていたシャルルに

「スクライア……」

「…先生…」

彼の前方から歩いて来たのは彼が局で
世話になった数少ない人物だ

「……本当にすまない」

「……先生が謝る事はないですよ……」

「……そうか……いや……人の感情に敏感な君だからこそ……もう此所にはいられないのか……」

「そういう事です……それでは、世話になりました」

彼は男に軽く頭を下げると歩きだし、直ぐに彼の視界からは消えてしまった

現在、”私立聖祥大学付属高校 1 - B 教室”

レイジは学校の授業を受けつつ、シャルルから、これまでのことや大体の事情を聞いていた。

『端末』の補助による念話で、頭の中で話していた。

《…レイジ君、プロト・レイジングハートの調子どうかな?…》

《…プロト・れ?…やっぱ、言い辛え…『レイフォン』!
それがいいな…》

デバイスに愛称をつける魔導師はよくいるが、彼のひねりのないネーミングセンスには、流石にため息をつくシャルル。

《…微妙だけど、君が言い易いなら…それでいいよ。》

苦笑するシャルル。

《ところで…こないだ、現れた”魔獣”とか言う未確認…
あれはなんだ?》

《…あれは、元々この世界や僕のいた世界には存在しない…
いや、存在してはいけない生命体なんだ。》

《?…そんなモンがなんで…こっちに出てくるんだよ…?》

存在しないものが出てきた。気になるだろう。

《…おそらく…何者かが…送り込んできた…か。》

シャルルは、頷きながら…前に、ある人物から聞いたことを思い出す。

《あれ程の生命体を生み出すには…『ロストログア』を使うか…S
+ランク

魔道師ぐらいか…?》

シャルルは難しい顔をして、ノートをとりながら、

《…それにしても”マリアージュ”って、何だろう?聞いたことも
ない…。》

《まり?…なんだそれ…》

レイジが聞くと、我に返る

《…うつん、なんでもないよ》

《なあ、シャルル。ロストログアって、何んだ……？》

《“遺失世界の遺産”…次元空間の中にはいくつもの世界があつてその中には、良くない形で進化し過ぎてしまった世界の技術や科学が、自分達の世界を滅ぼしてしまうんだ。その後に取り残された、危険な遺産…それらを総称してロストログアと呼ぶんだ……。》

《…そうなんだ……》

レイジはシャルルの難しい話を聞き、額に汗をかいた。

次の日… 学校が終わり、自宅に帰ったレイジは、何かの異変に気付く。

同じ様に、シャルルも何かを感じ取ったかのように、背筋に何か冷たいものを感じた、彼等は念話で話しながら、自転車で街中を走っていた。

シャルルとは現場前で合流した。そこは近所の高台に在る神社である。

2人は神社の長い石段を一気に駆け上がった。

「あれかつ!？」

石段の天辺にズザザアツと着地したレイジ。赤い鳥居の向こうに、異形の姿があつた。

大きい体の目が複数ある、クモの様な見た目をした魔獣だ。

シャルルは魔獣を見て、

「…他の生物を取り込んでいる・・・!? レイジ君、あれは多分・・・。」

「他の魔獣より、能力が上がってる・・・だろ？」

レイジはレイフォンを開くと、素早くキーを押した・・・すると急

に光りだす。

《sealing mode》

折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫ぶ！

「セットアップ！」

《set up》

―次元戦士エクセリオンは、わずか0・05秒でセットアップを完了する。次元戦士エクセリオンは、微粒子状に分解された3色の”フィン形特殊軽合金”を浴びて、わずか0・05秒で、セットアップを完了するのだ！」

体にコンバットスーツが装着され、頭部に仮面が形成される。

「はああああっ！！！」

突進して来る魔獣に、エクセリオンはパンチを叩き込んだ。

強烈な拳が炸裂し、魔獣が吹っ飛ぶ。

(…バトルスタイルなら、陸戦AAAかも…)

シャルルは戦法を見て、感心した。

そうしている内に…エクセリオンの複眼が発光し、情報が投影される。『リインブッカー』と書かれていた…、

「『リインブッカー』…使ってみるか！」

エクセリオンは腰の”i P a d形ツール”『リインブッカー』をソードモードに切り替え、魔獣に向かって攻撃を開始する。

「ハアアッ！」

—ザシュンツ！ザシュンツ！ズシャアアッ！—

『グオオオツ！』

——この魔獣は地軸を操ることができ、ブラックホールによく似た魔空空間を作りだすことができるのだ！」

「畏にぶっ飛んでたまるか！」

魔獣が飛び込む。

「チッ！」

魔獣の猛攻に苦戦するエクセリオン。

「あいつやっぱさつきより……強くなってるな！……だが、1度でダメなら何度でも決めるだけだ！！」

《G U N m o d e 》

エクセリオンは魔獣の攻撃にひるまず前に突き進む。

《B a r r e l S h o t 》

「はああっ！！」

エクセリオンの凄まじい銃撃に魔獣は抵抗出来ずに後退していく。

《S w o r d m o d e 》

「……紫電一閃！！」

そして勢い良く、リインブカー（ソードモード）を構えながら魔獣へと突っ込み、縦に一刀両断していった。

「はああああッ！」

『ヌグオオオオオオーッ！！』

紫電一閃を受けた魔獣は断末魔をあげながら碎け散っていった。

空間も消え、元の世界に戻る。

「・・・未確認生命体を倒すなんて大した者だ。」

「誰だ？」

後ろを向くと、発色のよい亜麻色の整った髪、服装は黒いスーツに色柄もののカッターシャツを着用した男が近づくと、エクセリオンはロギアを回収すると変身を解いた。

「高町・・・レイジ君、だね？」

「誰？」

その後、レイジは男に聞いた。

「あ、そうだったね。俺はこんな者だ」

男がエクセリオンに渡したのは名刺。書いてあったのは・・・。

『ティード・三浦・ランスター』

と書かれていた。

St・s・4 フルスロットル・エース

海鳴市警察署

”ティード”という男とここの休憩室でレイジは話をしていた。

「えっと・・・君がさっき変身してた”あれ”のことだけど・・・？」

彼はカップに紅茶を注ぐ、その時に、ポットをかなり高い位置に引き上げてまた戻すという、独特な注ぎ方をする。レイジは思った、
「この人はかなりの紅茶通だ。」

「・・・はい。」

「なんでもいい。詳しい事、聞かせてくれるかな？」

「良く知らないんですよ...ただ、『エクセリオン』ってあれの名前以外。」

ティードはレイジに話を聞いていたがレイジは答えられなかった。
自分もこないだ、変わったばかりだからだ。

「エク…？話しが全然進まないな…。」

「…拾った宝石が俺の旧式携帯に吸い込まれたら変わって…自分も変わって、もう何がなんだか。」

「…そうか、悪かった。」

すると、一人の女性がやって来る。

「…お待たせしました。調べてみたんですけど…解析できなくて…。」

「弓華君か？ご苦労…さて、取りにきてくれるかな？」

鑑識課

コンソールの上に、彼の端末が置かれていた。

「これは、君が持っていた方がいい…また、あの魔獣が出るといけないからね！」

「えっ？・・・いいんですか？」

「・・・分解できないし、君以外に使用できない上に、他人に触れることが出来ないようにプロテクトがかかっているしね・・・スキヤニングはできたけど・・・。」

レイジはコンソールの上にある自分の端末をとる。

「早く帰りたいんですけど・・・いいですか？」

レイジは疲れた様子で言った。そんな中、休憩室にあるテレビから臨時ニュースが流れた。

『突如オーロラと共に現れた未確認生命体は街にいる人々を襲い始めました。一部の情報によると、オーロラの中にある、濁った宝石が未確認生命体となつて現れる等・・・』

「クッ・・・行くしかないか・・・」

「・・・このままじゃ被害が広がってしまうわ」

ティーダは未確認生命体達を殲滅しに警察署を抜け出そうとする。
その時・・・

『うわアーーーーー!!』

「…あれ、なんだろう？なんだか今、すごく聞き慣れた声が聞こえたような…」

突然テレビから聞き慣れた声が聞こえ、レイジはテレビを見た。其処に映っていたのは……

未確認生命体の攻撃から必死に逃げているレイジのクラスメート、中島ホクトの姿だった。

「な、なんでホクトがあんなところに?!」

レイジは未確認生命体の攻撃をかわしながら逃げるホクトを見て驚いた。

「あの・・・どうかしたの？」

「レイジ君、彼は君の知り合いか？」

レイジの表情は険しいものだった。

「ええ!…ったく、こんな面倒な時に…あいつを助けに行くか!」

するとレイジは走り出した。

「えっ！？ちょっと！」

レイジはまずホクトを救出する事を先決し、急いで警察署から出ていった。

「待つんだ、レイジ君！」

とある通り

壁に叩きつけられ、身動きできないホクトにちかづいてくる、紅い未確認生命体は手にしたハンマーを振り上げる。

ホクトは震える傷だらけの手で落ちていた鉄パイプを紅い未確認生命体に向けるが、視界が霞み。腕が震えて狙いが付けられない。

（こんなので、おわりなのか？いやだ……まだ、見終わっていないアニメが……マンガが……）

ホクトはここには、いない悪友の名前を心の中で叫ぶ。

（レイジッー！）

彼はぎゅっと目を瞑る。だが、降ってきたのは、ハンマーではなく人の声。しかも聞いた覚えのある声。誰なんだ？

「目を瞑ると危ないだろ？ホクト。」

恐る恐ると眼を開けると、目の前には羽飾りのついた仮面、ベルトの腰に本の形をしたツール、聖祥大付属小学校制服のデザインに似たボディ、胸部の所に金属パーツが装飾され、腕、腰の部分に青いラインが入っており、青いレッグには赤いラインが入っていた戦士”エクセリオン”の後姿。

その戦士の右手は、あのハンマーの先端を握っている。

「アクセルスマッシュッ！！！！」

エクセリオンは懷に飛び込み、間合いを縮め、中心を目掛けて紅い未確認生命体に殴かかる・・・右手で『アクセルスマッシュ』を放ち、今度は左で放つ。

―グオオオオオオッ！―

すると、謎の生物は小さい鉋物を出しながら吹き飛んだ。

「空間に……引キズリ込ンデヤル！！」

―この未確認生命体は、地軸を操ることができ、ブラックホールに

よく似た魔空空間を作りだすことができるのだ！

…エクセリオンは構え、紅い未確認生命体を睨んだ。

紅い未確認生命体は後ろを振り向かずそのまま後退し、体制を整えた。

エクセリオンは紅い生命体の姿を捉えていた。

何かを展開しているが、何をしようとしているかはわからない。

紅い生命体は左手に小型鉄球を四個出現させ、放り投げる。

『シュワルベフリーゲン』

四個同時に打ち付けて、戦士に向けて放つ、鉄球はこちらに向かってくる。

「くっ！！」

エクセリオンは鉄球四個をどう巻くかを考えながら走っていた。

一直線で射出されてそれで終わりというわけではないようだ。

その証拠に誘導弾のようにして、しつこくついてくる。

右へ左へと道路を駆け回る。

「（キリがない…だったら…）ブレイクインパルス！」

エクセリオンは飛翔して、追尾してくる鉄球を振動エネルギーを帯びた右正拳で鉄球を弾いた。

目論見通り、鉄球はすべて破壊された。

「オラアアア！」

紅い生命体は手にしたハンマーを右斜めに振り下ろしてから何かを展開させる。

「カートリッジロード!!」

紅い生命体の手にしたハンマーのハンマー部分が自身に向かってスライドする。

ガシユンという音を立てながら。

冷却処理をするための通気口から蒸気が噴出す。

手にしたハンマーはハンマー形態から削岩機の先端のような状態になった。

「ツブス!!」

紅い生命体はこのとき『修羅』となった。

（なにいつ!?!）

エクセリオンは紅い生命体の手にしたハンマーの形態変化に驚いた。

「ブチ抜ケエエエ!!」

先ほどの尖った部分とは違う明らかに噴出口の部分が点火される。

ブシューウウという音を立てる。

最後に大きく巨大な武器を振り回した。

「ヤバッ!？」

エクセリオンは後方の障害物へと吹き飛ばされた。

「クッ!!」

別の空間に飛ばされ、障害物に叩きつけられた。

「どうする?あの化け物に、どうやって?」

エクセリオンと紅い生命体は体勢を直し、再び戦闘に入る。

「はああああああああああ!!」

『パンツァーシルト』

何かの障壁が発動し、攻撃を受け止める。

「くっ!かてえ」

ぶつかり合った衝撃は、以前の何かの障壁とは違い明らかに強化されていた。

（まさか同じ攻撃が通用しないなんてな…接近戦は不利か！）

紅い生命体はエクセリオンに向けハンマーを振り下ろす！

「カートリッジロード！クラエ！ラケーテンハンマア！」

エクセリオンは少しあせっているようだった。

「ぐあっ！くそっ・・・だったら、これだ！」

その声に応じ、エネルギーを両手にチャージ。

「デイベイン……バスタア……！！！」

エクセリオンは両手に集めたありったけの力を紅い生命体のゼロ距離で解放し、砲撃技を発動して紅い生命体を撃ち抜く、防御障壁がガラスのように砕け散った

「・・・とどめだっ！！フラッシュインパクト！！！」

そしてエクセリオンは紅い生命体目掛け、胴体を貫く。

「ウボアアアアア！！！」

強烈なパンチによるトドメの一撃が直撃し、紅い生命体はガラスのように砕け、大量の宝石が辺りに散らばる、

エクセリオンが現実世界に戻る。

「とりあえずは勝った・・・のかな？」

「なんなんだ・・・一体？」

ティードは不思議そうに言った。

海鳴市警察署。

「……なるほど、大体解かったよ。」

椅子に腰掛けているティードがそう呟く。

「戻ろうかと思ったんですが、あれはもう彼の物だし、未確認の事も気になりますしね。」

シャルルがそう言った後、ティーダは立ち上がって、お茶を淹れ始める。

「まあ、これでも飲んで落ち着きなさい。」

カップに紅茶を注ぐ、その時に、ポットをかなり高い位置に引き上げてまた戻すという、独特な注ぎ方をする。

「…いただきます」

少し躊躇していたシャルルだが、最終的にカップの飲み口に口をつける。

「どうだ？　俺がブレンドした茶の味は？」

「美味しいですね…なんか後引く美味さって感じです」

「お、分かってくれる人がいて嬉しいな」

落ち着いたと思ったら、やっぱり不安になってくるシャルル。果たして自分に何が出来るだろうか？と、

「大丈夫だ、心配しなくても・・・君になら何か出来るさ！」

「あ、有難うございます。」

不安になるシャルルをティーダが励ます

時は経ち、今は夜

「ただいま」

レイジは自宅に帰宅して、ただいまと言う。大抵両親がおかえりというのが常だが、今回はかりは違った。

「おかえりレイジ」

「兄さん!？」

2階から士郎の返事が返ってきたのだ。レイジは急いで靴を抜いで階段を駆け上がる。

さらに数時間後… 19:55

「相変わらず世話をかけるな」

椅子に座るレイジの兄、士郎。前のテーブルにはケーキとティーカップが置かれている。

「それは言わない約束だぜ、ア・ニ・キ！」

「おう！」

兄弟仲良く、ハイタッチをするが・・・レイジの体が揺れる。

「痛^いってなあ……」

レイジはお茶を淹れながら文句を言う。恨みがましい視線を送るが兄、士郎は知らん顔だ。

「参ったなあ……」

「どうかしたのか？」

レイジは難しい顔をしていた兄を心配する。

「いや、大丈夫だ、ごちそうさま。」

皿洗いをしながら返事する。

「——おう。」

「……レイジ。お前変わったな！」

「そんなことないよ、兄さんみたいに、強さも技術もない……あんな格闘技もできない……俺、才能ないんだよ。だから……」

レイジの言葉に、呆れた表情の兄、士郎は デコピンをお見舞いする。

この威力、相変わらずだ。以前の『鉄パイプで鉄板を切る』なんて冗談を言っても信じられそうなくらいである。

「痛つてえ……何すんだよ！」

「レイジ、お前は少し勘違いをしているようだ」

「か、勘違い？」

「お前は確かに未熟者だが、決して、弱くはないし、才能もあるし、俺に持っていないもの」がある……少なくとも俺はそう思う」

士郎の言葉に対して驚いた表情になるレイジ。

「それに、俺と親父がお前に教えることなんてなんもないぞ？」

「え？」

「前にもいったろ？修行なんて何処でも出来るんだ、高みを目指し、学び、変わる。それさえあればな……それに、」

士郎は優しく笑いながらレイジに言った。

「なんだよ？」

「……そうだ、彼女の一人でも作ったらどうだ？お前は朴念仁だからな。いつも女の好意を誤解する。」

「・・・凜さんを困らせてる兄貴に言われたくないよ！」

「言っただな！？その言葉・・・高くつくぜ、来い！！！」

「ちよつ、ちよつと、あにき——アッー！」

このあとレイジが兄、士郎と組み手をしてレイジがボコボコにされたのは言うまでもない

ザアアア・・・

彼の端末が光っていた”聖王のゆりかご”と書かれていた・・・。

謎の未確認生命体との戦い・・・これはまだ序章に過ぎなかった。

S t · s · 5 極付派手第一人者（きわめつきはでなすといかあ）

4月12日…PM7:39 - - -

「チイツ！一体何がどうなってやがんだ？！」

とあるビルの屋上では男が消えていくオーロラを毒づきながら眺めていた。オーロラは消えたビルの元へ向かう為に屋上から降りようとするが……

「…ん？」

男の後ろからマゼンダの未確認生命体が姿を現し、男に近づき片手剣を構え、目の前に立ち止まっていく。

「・・・悪いが、お前に用はない。あばよ！」

男は姿を消した。

その頃…鳴桜邸、近所から『幽霊屋敷』と有名なボロい洋館。

屋敷から2人の少年、少女が出てくる。

男の方は普通のどこいでもいる高校生に見える。

「うわぁ！遅刻だ！」

女の方は普通の少女だ。

「トモが寝坊するからでしょ！」

翠屋、レイジの部屋

——…ピピピッ——

「…ん？ホクト…？」

突然レイフォンがなり、レイジは電話を取る。

『レイジ、お前のバイク直ったぞ。』

「！？ 本当か……？」

『ああ……取りに来いよ。』

——海鳴市にある町工場「中島製作所」

ここにやって来たレイジはホクトに会い、さっそくバイクを受け取る。

「で、俺のバイクは何処いった？」

はあ…とため息をついたレイジ、ホクトの父ナガレはお茶を淹れながら事情を説明しだす。

「ん？レイジ君の注文どおり、カスタマイズしておいたよ。」

「誰が、魔改造しろって言った!？」

ホクトに怒鳴るレイジ

「いや、だって・・・ヒーローって言ったら専用バイクだろ？」

「こんなに乗ったら、捕まるだろ!？」

そんな時、ティーダがやって来る。

「…いや、構わないよ。俺が色々手続きしておいてあげよう!」

「ティーダさん。」

そう言うと、”レイジのバイクだったもの”に触れ、答える。

「こついう力も後々、必要になるだろう?」

次の週の休日の朝、ティードは”洛高第三生徒会”の生徒会長である女性と一緒に私立洛芦^{らくろわ}和高校の屋上に来ていた。そこにはいかにも、剣で斬りつけたような痕がそこかしこにあった。

「これで、20件目ですね、ティード警部。」

「ああ、襲われたのは学園の生徒みたいだな。どう思う?黒崎朱湮さん」

ティードはしばらく考え込んでいた。事件の始まりは一週間前だ。一週間前、洛高の生徒が、倒れている姿を発見された。この時、まだティードが未確認生命体の事件の件で、朱湮は生徒に気をつけるようにと伝えただけだったが、それから何度も同じようなことがあり、朱湮は知り合いであるティードに捜査協力を依頼したのだった。

「明らかに未確認生命体の仕業だと思うけど……この刃渡りの広い斬り後は何でしょう?」

「未確認生命体か。彼には悪いけど、レイジ君に任せよう。」

ティードと朱湮は現場を他の者に任せ、レイジのところへ向かったのだった。

「…で、如何してティーダさんがここに居んの？」

あの事件後、休日にティーダ警部がレイジの家を訪ねる、パジャマから私服に着替えたレイジは、何故ティーダが自分の家に来たのか理由を聞いてみた。

「君には今から、私立洛芦和高校に行ってもらいたい…」

如何やら彼にいつてもらいたい場所があるみたいだ…

「『自分』は特命係の「ティーダ・三浦・ランスター」といいます。…お邪魔してすみません『高町なのは』さん。」

「いいんですよ、それより警部さんうちの子がなにか？」

「余計な事聞かなくていいよ。じゃあ、俺いくから…ったく…」

彼の母はともアラフォーには見えなくらい若く見える。

「…レイジ君？今、すごく失礼な事言わなかった？少し頭冷やそうか??？」

彼の母は何故か黒いオーラを放ち、それを見たレイジは危険を察知し…。

「…言ってます、行って来ます！」

レイジは幼少の頃に父親から貰った木刀を持って家を出た。

私立^{らくろわ}洛芦和高校

—キャアアアアアッ！—

突如校舎の方から悲鳴が聞こえ、レイジ達は思わずその方角を振り向いた。

「今の悲鳴は…？」

「何かあったみたいだな。レイジ君、行くぞ！」

「は、はい！」

ティードとレイジは状況を確認める為に校舎へと向かっていった。

洛芦^{らくろわ}和高校の中。この場所で、先程の悲鳴をあげた少女が片手剣を構えたマゼンダの未確認生命体に追われていた。

「っ、こないで…！」

『紫電一閃!!』

少女は必死に命乞いするが、未確認生命体は聞く耳持たずといった感じで剣を振り上げた、その時…

「ハッ！」

少女が見たものはなんと…レイジが未確認生命体に木刀で攻撃をしているというなんとも異様な光景。

「向こうに行つてろ！」

「うん！」

（ここで変身していいのか？やるしかないか！）

レイジは心の中で毒づきながらも未確認生命体を洛芦和高校の外へ誘き出す。するとマゼンダの未確認が話しかけてきた。

『ナンダ、貴様ハ？』

（…やっぱり、未確認は人の言葉を…？）

レイジは少し間合いを離し、携帯電話型ツールのエンターキーを押す…すると携帯が急に光りだす。

《sealing mode》

折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫ぶ!!

「セットアップ!」

《set up》

光輝く、フィンがレイジの周りを踊る。光が消え去ると、そこにいた彼はエクセリオンに姿は変る。

「ナニッ!」

エクセリオンはマゼンダの生命体の攻撃をかわしながら応戦する。そんな中、近くにいたティーダがエクセリオンに命令する。

「もつとしつかり相手をよく見るんだ、レイジ君!」

「分かってます・・・ん?」

エクセリオンはティーダと話していると、彼の後ろに「オレンジ髪のツインテール少女」のシルエットが見えた。

「・・・どうしたんだ?」

すると・・・複眼が発光し、情報が投影される。オレンジ色の文字で『シューティングアーツ』と書かれていた。

「これは『シューティングアーツ』?・・・?やってみるか!」

エクセリオンは携帯電話型ツールにXC-03と入力する…

《Optic Hide》

すると、エクセリオンの姿が消える・・・そして。

《Variable Barret》

『グアアアア！！オノレッ！』

滅茶苦茶な戦い方でマゼンダの生命体と戦うエクセリオンの拳銃の連射力はティーダの考えより速かった。

「なっ！？」

《Dagger Mode》

「これでっ！」

エクセリオンはリンブッカーを「ダガー」のような型に切り替え、突進する。

『ムッ！？』

互いに止まることなく一気に距離を詰めていく。

（バリアを切り裂いてフィールドを突き抜ける！）

遠距離も近距離も得意とするエクセリオンは接近戦のダガーモードに切り替える。リンブッカーからはオレンジの刃が形成された。

「真っ直ぐ…行くぜっ!!」

「ナンドトッ!」

《Fake Silhouette》

エクセリオンの周りに何かが形成されると、その叫びと共にエクセリオンが数人に分身する。50人に分身したのだ。

『うおおおおお!!!!!!』

『!?!』

その場にいたティード達全員が驚いた。

「エクセリオン達」はかく乱するように左右に散らばっていく。

『いけええええええ!』

四方八方から放たれる、銃と剣による攻撃の嵐。

『グオアアアア!?!』

マゼンダの生命体は断末魔の悲鳴をあげながらガラスのように碎け、宝石へと化していった。

その時だった、少女がこっち側にとんで来た。

「キャッ！」

エクセリオンが少女を受け止めると少年が目の前に現れた。

「大丈夫か操緒！？」

「あつ、トモ。うん、なんとか・・・その、コスプレのお兄さん
もありがとう。」

その言い方に、エクセリオンは少し怒る。

「だれがコスプレだ。俺も好きでこんなカッコ……ん、だれだ？」

エクセリオン達を影で見ていた別の何かが近づいてくる”狼型の
未確認生命体”だ。

『グルル・・・見ツケタゾ。イレギュラーメ！』

「……チッ」

「危ない！」

”狼型の未確認生命体”の攻撃をかわし、少年の方を見る。

「誰だ！……ん？」

彼の影から”漆黒の巨人”のようなものが一瞬だけ見えた、その時だった・・・再び、複眼が発光し、情報が投影される。青と銀色の文字で『Unchain Knuckle』と書かれていた・・・がその時、

「空間に……引キズリ込ンデヤル!!」

―この未確認生命体は、地軸を操ることができ、ブラックホールによく似た魔空空間を作りだすことができるのだ!

「またか・・・?やってみるか!」

エクセリオンは再び携帯電話型ツールに入力する…

《Unchain Knuckle》

「はあああ!!!!」

繋がれぬ拳で空間を砕きつつ、衝撃波で”狼型の未確認生命体”を吹き飛ばした。

「もう一発!!」

「ナニッ!?グアッ!」

エクセリオンは両手の拳に何らかの力を集め、渾身の一撃を放った。

「リボルバーキャノン！」

「ぐうわあああああつ……！」

直撃。

「……終わったか。」

狼型の未確認が爆発し、濁った宝石が散らばっていったのだった。

エクセリオンが現実世界に戻る。

——私立洛芦^{わろろ}和高校前、

先ほど遭遇した少年は夏目智春：少女は水無神操緒というらしい。
エクセリオンは変身を解き、彼等に事情を説明。

それはさておき、道の中央にバイクが停まっていた。

「何だあれ？」

「わゝ。かっこいいバイクだ。」

智春と操緒が不思議そうに言った。

すると、バイクに乗っていた漆黒のライダースーツの女性がこちらに近づいて来た。女性は端末でディスプレイを展開する。

するとモニターから一人の男が映し出された。

「な、何だ？」

レイジは驚いていた。

『始めまして、高町レイジ君！』

男は笑いながら言った。レイジは疑問に思っていた。何故男が自分の事を知っているのかを。

「だれですか？」

「・・・・・・・・それはこれから話そう。」

漆黒のライダースーツを着た女性が話すと、モニターの男が喋り始める

「申し遅れたなあ。ワイはヴォルケンリッター社の社長・・・・」 八神一郎”や。”

「ヴォルケンリッター社！？」

八神一郎の言葉に智春は驚いた。

「ヴォルケンリッター社？何だそれ？」

「ヴォルケンリッター社・・・・ねえ、トモ！確か・・・・」

操緒が智春に聞く。

「夏目君の弟さんかな？君のお兄さんとは、何回か”色々な物”を共同開発をした事があるで。」

「はあ。」

八神一郎は笑顔で言った。

「で・・・ヴォルケンリッター社の社長さんが俺に何の用ですか？」

「その事やけど・・・どうやレイジ君！君の”プロト・レイジングハーフト”の調子は？」

『！？』

「あんた、コイツの事知ってるのか？」

レイジが不思議そうに聞いた。

「・・・おう、あれを発見したのは、シャルル君とワイらや・・・」

八神一郎の言った言葉にレイジは驚く。

「・・・発見した？」

レイジはまた、質問する。

「・・・おう、ワイらが発見したアレは元々”祈願型プログラムによって、持ち主のイメージを基にーから構築”するデバイス達の始祖なんや！」

「・・・そういえば、君は”自分の旧式携帯電話が変化した”と言ったね？」

と、ティータ、

「ええ、あの時”新しい携帯が欲しい”って思ってたから...。」

それで、こうなったのか・・・と”プロト・レイジングハート”を見て、心の中で思うレイジ。

「・・・シャルル君も言うてたけど・・・輸送中に勝手にどっか飛んでってもうた。」

「それで、俺の家に……。」

「……ですが、なぜ彼なのですか？それと”プロト”と言う事は次世代機が存在しているのでは？」

「質問多いなあ……なぜ彼かはわからんし、次世代機の存在はしらへんな……。ただ”プロト・レイジングハート”を扱えるのは”選ばれし不屈の心の持ち主”だけ……みたいやな。」

（”選ばれし不屈の心の持ち主”……？）

「……まあ、それは置いて、レイジ君……今回は君と相談をしようと思っくんやけど。」

「相談？」

八神一郎は向こうで机に何かを並べながら言った。

「ワイらはこれから君達に便利な道具を提供……更にエクセリオンの新たな武器や新作のレリッククロイドの開発を進め、君達を

支援しよう・・・セルティ君！」

「お近づきの印しに。」

漆黒のライダースーツの女性セルティはBOXをレイジに渡した。

「それではレイジ君！グッドラックや！！」

セルティは端末をしまいその場からバイクに乗り去っていった。

「あれ？トモ。さっきの機械が入ってるよ。」

開けると、BOXの中身はエクセリオン専用の…新ツール『ハーティアルローダー』だった。

「これは・・・さっき見た機械の中に似たようなものなかったけど・・・？」

新ツール『ハーティアルローダー』を眺めて考えるレイジ。

レイジはこれの機能を把握した。自分のサポートも出来るようでも様々な機能を搭載した多機能なツールだった。

ヴォルケンリッター社研究所、

「クロノ君？例のアレはどうや？」

高らかに声を上げたモニターに映る白衣の男。彼の目線の先にいる男は・・・近くにあったBOXを開けた。

「はい、新たなセットアップシステム……『アステイオン』が完成します」

男はBOXの中身に驚いた・・・そこにはレイジの”端末”とは違うツールが入っていた。

「これはあくまで…」真似た物”なんですが……。今すぐに試していただきたいです。」

「いや…ちょっと待ってえな、クロノ君？」

「ええ、それは八神社長に任せます」

「では、クロノ君？」

映像が消えると後ろから一人の女性がクロノのところに現れた。しかし、平然と堂々とまるで初めから来るのを分かっていたように。

「いいの？あなた。」

「エイミィか…ああ、まだ早いつて社長が言ったからな。」

「そう、あなたも無理しないでね。」

「わかってる。後は”夏目 直貴”君の力を借りたい所だが…。」

クロノはドアを開け、空を見上げた。
と、そこへ

「やあ。」

そう言い研究室に誰かが入ってきた。

「君は！？ ”夏目 直貴”君。」

「ドクタークロノ、エイミィさん、調子はどうですか？」

”夏目 直貴”と呼ばれた青年はそう言いながら、資料や映像記録の入ったデータパックを渡す。

「あら、ありがとう。」

「……ご苦労……それより、”彼等”が接触したそうだ。」

「ふむ、やはり”こちら側”でも「僕達は」何かと面倒事に巻き込まれるみたいだね。」

「ああ。そうだったね”君たちは”。」

クロノは紅茶を一口含むと言った。

「それにしても、海鳴市に『はぐれ眷属』ロスト・チャイルドまで出現するなんて……
やっぱりあの街には何かあるのかしら？」

エイミィはそう呟いた。

時は経ち、今は夜

「……どーゆー事が説明してくれる？レイジ君」

先ほどの騒動から凡そ数時間後・・・レイジは自宅に帰宅して母と食事を取りながら話をしていた

「わからないよ・・・俺にもさっぱり。」

・・・当然である、門限を過ぎていたのだから・・・。

「そーじゃないでしょ?」

「・・・たは。」

そして、これが彼の長い戦いの始まりでもあったのだ

St・s・6 A・sチャンネル

銀河の遙か彼方にある「とある惑星」。

そこにはこの星に住む優れた戦闘能力を持つ金属生命体が存在した。

その中で「コア」を持つ金属生命体は自ら戦う意思を持ち、「とある惑星」の戦争において最強兵器として君臨していた。

後の、神々の怒りと言われる大規模な地軸変動が起こり、それによつてかつて栄えていた「とある惑星」の高度な文明は壊滅した。

それから数千年後。大変動を生き延びた人々は独自の文明を築いていた。

共和国と帝国の戦争、停戦後の軍団、組織、武国との戦い……。

これまでの戦いで、不屈の心で生き抜いた、一体の”獅子の金属生命体”がいた……。

その名は”アルティメットX”

”獅子の金属生命体”は今なお、石化して眠りに就いている。

不屈の心を持つ新たな主をまるで待っているかのように……。

私立聖祥大学付属高校

ホームルームも終わり、全員が帰宅や部活の準備を始めたころ…

「あゝ？ロボットだあ？」

「ヒーローだったらやっぱロボだろ！？こっ…ガキョーン！ガキョーンって！」

ロボットの話をしてくるホクトに対し、レイジはドン引きしていた。

「俺に戦争や武力介入させる気か！？」

「おっ！珍しくノリがいいな、レイジ！」

そりゃあ、オタクにつき合わされてりゃ変な知識が身につく・・・
と心の中で思うレイジだった・・・。

「なあレイジ、今日暇か？」

レイジは既に鞆を担ぎ、教室を出ようとしていた所だった。

「ああ。どうせ部活にも入ってないしな」

「よかったら、一緒に町に繰り出そうぜ」

「いいな！？そうか、——！」

そんな会話をしていた時、何かの声が聞こえた。

「どうしたんだ、レイジ？」

「いや…今、妙な声が…」

「？・・・まあ、いいや。早くいこうぜ！」

そう言いつと、レイジはカバンを持って一目散に教室から駆け出した。
ホクトもそれを追い掛けた。

「ホクト」

「ん？　なんだ？」

「ア○メ○トには行かないからな！」

余計なものを買わせないよう、予防線を張るレイジ。その言い方にホクトが姿勢を崩した。

「おまえなあ……」

ホクトが恨みがましそうな視線でレイジを見上げる。

- - - - -

レイジとホクトは一緒にファーストフードのハンバーガーショップで買い食いをしていた。二人掛けのテーブル席で向かい合っている。その途中、

「そう言えば、土郎さん帰ってきたんだって？」

「おう」

レイジが返事をする、驚きのあまりホクトは持っていたハンバーガーを落としてしまった。

「珍しいな、確か「ギアナ高地」で修行してたとか……？」

”黒い影”は怯える、るん達にゆっくりと近づいていく。

「来ないでえッ！」

「るんちゃんに近づくな！こんのおおッ！」

トオルは近くにあったパイプ棒で近づいてくる黒い影を追い払おうとする。トオルは力任せに黒い影を殴るが、それはまったく言うていい程無意味だった。

「い、い、いやあ！イヤアアアアアアッ！！」

「あ、あっち行けっ！」

『キシヤアアアアッ！！』

パイプ棒も払われ、絶体絶命に追いやられた4人。そして、黒い影に襲われ、追い詰められてしまう…だが…。

（くッ、間に合わない…！！）

迫り来る黒い影・・・ナギが諦めかけた、その時だった。

「伏せろ！！」

『えっ！？』

ゴオオオオオオ…！！

何処かから轟音が迫ってきたのを感じ取り、4人は素早く伏せた。

「なッ！今度はなんや？！」

その轟音の正体は突然発生した、桜色の強烈な光だった。

「グオオオオ…！」

「ギャウウ…！」

「・・・何？」

啞然とする4人。

エクセリオンは黒い影に近づこうとするが、黒い影は突然物凄いスピードで逃走していった。

「お前ら、そこを動くな！」

そう叫んだ、仮面の戦士・・・エクセリオンも地面を蹴って飛び立っていった。

「おい！待てよおらあッ…！」

エクセリオンは加速し…逃げられないことを悟ったのか、ストップした黒い影はエクセリオンの方へ振り返る。

―黒い影・・・魔獣は地軸を操り、ブラックホールによく似た空間を作りだす。

「だったらコイツで！」

レيفونを操作、バイクが現れる。

「・・・行くぜ！」マシンライオット”！！」

命名ホクト。

エクセリオンはそれに乗り込み、バイクハンドルのスイッチを入れたら、バイクのボディが装甲で覆われ、変形。たちまちスピードを増す。

ライオットで空間を駆け、エクセリオンが魔獣を追い詰める。

「ホイールプロテクション！」

ウィリー走行でそのまま体当たり。

グエエエエッ！

吹き飛ばす魔獣、それと対峙するエクセリオン。

「たあっ！！」

拳を握り締め、その魔獣を目掛け、『アクセルスマッシュ』を放つ。

「アクセルスマッシュ！！！」

魔獣はエクセリオンの何倍もの体躯の怪物になり、『アクセルスマッシュ』をふせぐと、強烈な砲弾を放つ。

「ぐあっ！」

その衝撃で吹き飛ばされ、地面にたたきつけられるエクセリオン。

中型魔獣は人型の分身を作ると、エクセリオンを囲み、一斉攻撃。彼はそれを大ジャンプで交わす。

そして強力なパンチ、キック、投げ技で次々に分身をなぎ倒してゆく。

「数で敵うとおもったか？」

分身が一掃され、エクセリオンと中型魔獣の一騎打ち。

中型魔獣の爪がエクセリオンの背中を裂く。

《Sword mode》

リンブッカー（ソードモード）が中型魔獣に炸裂。

中型魔獣がとび上方へと逃れる。

エクセリオンは大ジャンプで、たちまちそれに追いつき、パンチ、キック、投げ技の応酬。

「リボルバースパイク!!」

そしてエクセリオンの渾身のキックが、中型魔獣に炸裂。

「……ウ……ゴ……オオオ……」

リボルバースパイクを叩き込まれ、倒れた中型魔獣の体が爆砕、青い宝石が飛び散る――

「…あんなモンが夜中に各地を飛び回るなんて異常だな……。」

エクセリオンはロストロギアを回収し、現実世界に戻る。

変身を解く……すると先ほどの少女達に見られていた。

「あ、あんたは？」

「…翠屋のおにーさん…？」

4人は変身を解いたレイジの姿を見て驚いていた。

「おう。それより、危ないから……帰ったほうがいいぞ!」

「……うん、みんな帰ろう。」

そう聞いた3人は帰っていくが……。

「ん?どうした?」

トオルはお辞儀をして、

「・・・あの、るんちゃんを、助けてくれて、ありがとう・・・。」

すると、一瞬”ピンクの衣装に身を包んだツインテールの少女の面影”がトオルに重なった。

「あ？・・・ああ、解かったから行けよ。」

トオルはレイジにお礼を言った後、4人の元へと向かった。

S t · s · 7 クロスF（ファイアー）ゲーム

イギリス某所。

『P l a s m a S m a s h e r』

何者かが放った、18発の魔力弾は、均等に6発ずつに分かれて格目標を追尾。二人のシスターへと砲撃を放つ。その砲撃は背の低い方のシスターの前に浮かんでいた袋に命中し、中身の金貨が辺りにばらまかれた。

「ひゃあ!？」

「シスター・アズマリア、下がちなさい！」

もう一人のシスターが魔力の車輪を構えながら叫び、その直後車輪が爆発し破片が男へと襲いかかる。迫る破片に対し少女は動じず、魔力弾で受け止め、そのまま他の二人が被弾しないような方向に投げ飛ばした。

「この程度か？」

「し、シスター・ロゼット……」

「くっ……あなた、何者です!？」

「答える必要はない!」

自分目掛けて飛んできた魔力弾を前に、右足を向ける。

そして、中心に、風が急激に渦巻き始め……小さな台風のようにも見えるものになっていく。

一方その頃……

レイジがエクセリオンになって、数週間後、彼は野球場にいた……
助っ人選手として……。

今日は私立聖祥大附属高等学校と私立洛芦らくろ和高校との試合。ホクトは三塁側の応援席にいる。

（あの野郎、後で覚えてろ……。）

他にも短ランを着てメガホンを持った生徒たちや吹奏楽部員、観戦に来た大人や子どもたちの姿が見える……もちろん、彼の知り合いや母……だけでなく家族も。

「しっかりね〜!」

彼らの多くは、聖祥大附属高等学校の応援に来たんだろう。ホクトもそうだが、もう一つ理由がある……。

今、座っている観客席の隣には階段があり、縦一列にチアガールが並んでいた。

着ているのは白色をベースにした服だ。

首から肩、胸の部分にかけて青いラインがあり、黄色の横文字で『SEI DAI HIGH SCHOOL』とプリントされている。

「バニングス…！？」アリシアまで！？」

持っているのは赤いポンポンで、履いているのは白色のミニスカートだ。

チアガールは綺麗な子がそろっている。その中でもアリシアはダントツで美少女だった。

ただ、顔色がものすごく悪い。今にも倒れそうな感じだ。

（…アイツ、恥ずかしいのを無理してないか？）

今日のアリシアはポニーテールに白いリボンだ。それがチアガール姿とよく合っている。

シャルルはそんな彼女のすぐ近くにある応援席に座り…彼女の顔色が優れないのを見て、心配する。

後ろのルシエが声をかけている。

「大丈夫、アリシア？　なんか顔色悪いよ」

「ううん…大丈夫、心配しないでルシエさん。（レイジ君が頑張ってるんだもの…この程度で恥ずかしくなんか、ないわ…。）」

「ホントに？ 無理しないでね。今日は暑いから熱中症も怖いし…。」

「そう言えば、本当に暑いなあ…。」

ホクトがそんな事を言うと、ティーダは水筒を取り出す。

「紅茶で良かったら飲むかい？」

「こんな暑いのに!？」

熱いお茶を飲まされると思う、ホクトとシャルルは…。

「もちろん、アイスティーだ。」

「頂きます。」

空は雲一つなく、日の光が直に照り付けていた。

両校の生徒たちはペットボトルに入ったスポーツドリンクを飲んだり、アイスを食べたりして暑さをしのぐ。ホクトも首にタオルを巻き、ティーダからもらったアイスティーをちよくちよく飲んでいった。

やがて試合が始まった。洛芦^{らくろわ}和高校の攻撃が終わり、聖祥大附属

高等学校の番が回ってくる。

吹奏楽部が校歌を奏で始めた。

テンポが早く強弱があつて、勇壮極まりない一曲だ。兵士を戦場に駆り立てるようなイメージを受ける。

先頭に並んだトランペットが、日の光を受けて黄金に輝く。生徒たちは桜色のメガホンを構え、

「聖大！ 聖大！」

と叫び続ける。

そんな中、チアガールたちも笑みを浮かべながら踊り始めた。ポンポンを振り上げたり体を回転させたりと、華麗な踊りだ。

聖祥大附属高等学校のチアガールはミニスカートを履いている上に激しく足を上下させるが『見えそうで見えない』

ホクトは右手にメガホンを構えて大声で応援すると、レイジが振り向く…。

「……っ！」

『見られた』と思いアリシアはバランスを崩すが…。

体勢を素早く持ち直した後、再び踊り始めた。

レイジは「…すごい精神力だ。」と感心しながら…球を射つ。

でも、バニングス達と比べると明らかに動きがぎこちない。

やがて…足元に転がってきた空き缶を踏み…すっころんでしまった。

後ろのルシエがあわてて駆け寄る。

「大丈夫？…誰かしら、本当にもう…。」

「ごめん、私は大丈夫だから…。」

アリシアはにつこり微笑んだ。ルシエは安心し、配置に戻っている。

大丈夫なんて言うてたけど、足元はおぼつかない。

アリシアたちがポンポンを腰に当て、一斉に右足を振り上げる。

やがて洛芦^{らくろわ}和高校の攻撃が終わり、レイジはアリシアのもとへ向かった。

「おい、大丈夫か？「大丈夫じゃないに決まっているでしょ！」「…！？」 母さん？」

レイジの母　なのはは、鋭い目つきで彼をにらみつけて言うと…彼は怯む。

「だから何が「…自分で考えなさい」「…っんだよ！？」」

そんな会話が終わると彼らはそれぞれの場所へ戻った。試合は二回裏、聖祥大附属高等学校の攻撃だ。点数は今の所0対0。

吹奏楽部が大音量で演奏を始め、観客席の声援もヒートアップする。そんな中、レイジが最近、習得した『シュワルベフリーゲン』の用量で一、二塁間を貫くヒットを放った。

応援の生徒たちは満面に笑みを浮かべ、メガホンを振りながら喜ぶ。

ホクトは素直に喜んだが、それどころじゃない者が若干一名いた。アリシアだ。

バニングスたちは跳び上がって叫んでいるのに対し、彼女は顔色が良くない。

ホクトも心配になり、横から話しかける。

「アリシア、少しは喜んだらどうだよ。レイジがヒット打ったんだぞ？」

やはり、様子がおかしい…。

バニングスも心配し、アリシアに声をかける。

「アリシア…アンタ、具合悪いなら休んでなよ。無理する事ないよ」

「うん。ありがとう…ちょっと抜けるね」

彼女が顔を赤らめながら階段を上がっていく。シャルルはその後を走ってついていった。

「…やっぱり、そうか。」

「…あなた、まさか…？」

シャルルはアリシアの体調不良の原因を知った。

「『この球場』に、未確認…魔獣が入って来ないように、常に結果を張ってたんだよね？…無茶するよ！」

「！？ あなた、何者な」君と同じ、魔導師だよ。「…！？」

そこヘティードがやってくる。

「後はシャルル君がやるらしいから…君は戻りなさい。」

「…はい。」

アリシアは配置に戻った。

「さてと……展開ッ！」

やがて三回の表が終わり、洛芦らくろわ和高校の攻撃になった。

体調を取り戻したアリシアと安心したバニングスたちは、水が舞…波が踊るように応援する。

皆がはつらつとした動きを見せている中で洛^{らく}芦^ろ和^わ高校の攻撃が終わる。

試合は六回の裏、レイジ達、聖祥大附属高等学校の攻撃だ。

今の所0対0で、ノーアウト二塁三塁。バッターはレイジ。これは得点のチャンスだ！とホクト。

吹奏楽部の校歌が大音量で響き渡り、メガホンを握った生徒たちが汗を垂らしながら声援を送る。

アリシアたちの応援もいよいよ激しくなり、全員が一斉に右足を上げた。さらに、彼女たちは華麗に舞う。それにつれてミニスカートがふわっと浮き上がる。

「癒される〜」

とホクト。

聖祥大附属高等学校はこの回で二点を入れて攻撃を終えた

試合は2対1で聖祥大附属高等学校が勝ち、レイジたちは球場を後にした…、

そして・・・丁度同じ頃、

「…ったく、結界だなんて小賢しいわね・・・管理局の犬！」

「あつ、もう時間切れだ？…チツ、行こうよお嬢」

何者かが様子を見ていると、背後に歪みが現れる。

「ええ…また別のゲームが待っているわ…」

そう言つと何者かは歪みと共に消えていった。

S t ・ s ・ 8 隣り合わせの死と平和

高町家。

レイジが自室で休んでいると、急にレイフォンが鳴った。

「ん？アリシアか、どうした？」

『え、うん、その、なんだけど。ね、レイジ君、今日は空いてる？』

電話の相手はアリシア、だが・・・テンパッタしゃべり方だ。

「ああ、空いてるけど・・・。それがどうかしたか？」

『そ、そうなんだ！その、買い物に付き合ってくれる？』

頭上にハテナマークが浮いているレイジ。

「いいけど、なんだよ・・・いきなり。」

『ううん、ありがと。それじゃあレイジ君のうちの家に行くから待って

いてくれる?』

「わかった、それじゃあアリシア、待ってるよ。」

そして電話を切り、下におりた。

「あら、レイジ君。どうしたの?」

「アリシアが来るみたいだからな。」

母、なのはは優しく笑っているが……多分心の中では……。

「あらあら、レイジ君やるわね、お母さんは嬉しいぞ?……うふふふふ」

「茶化すなよ！」

そんなことを言っていると、玄関が開く。

「こんにちは、なのはさん。」

——そういえば、アリシアの格好、制服しか見たことないな……。

そんな言葉が、頭をよぎる。だがここで口に出しても母にまた茶化される。

「どうしたの？」

「ん、いや……。」「

「あらあら」

レイジは母なのはにキッと睨む。

「時間だな……、それじゃあアリシア、行こうか？」

「うん。」

・・・アリシアは上機嫌だった。持ち続けた夢に向けて確実に近付
きつつあるのだから。そして、今日。その自分へのご褒美として・
。

「ふふっ、（レイジ君とデート♪）」

「さっきから、ニヤニヤして気持ち悪いな。どうしたんだ、アリシ
ア？」

「・・・（レイジ君のバカ）教えてあげない。」

そう言っただけで顔を膨らませ、機嫌を悪くしてソッポを向くアリシアは
まるで子供である。そんな行動に、レイジは自身の頭を掻く。

こうしてデパートの中に入ったレイジ達だが、それがいけなかった。
そう、レイジはこの時気が付くべきだったのだ。

ここは海鳴市の一角にある商店街。

今店内は大騒ぎになっていた。

「……………」

騒ぎの原因となっている少女は静かにたずんでいる。

（負の感情を持った人間はいないかな？）

黒い髪と、深い紫の瞳の…学生服のような衣装を纏って、黒い杖の様な物を持っている少女は、店内を見渡す。

「どこかに手頃な奴は……。」

とあまり感情を感じさせない声で呟っていた。

「ん？」

少女はある女子高生を見つける。

「丁度いい……」

少女は一つの……『黒い宝石状の物質』を1個取り出す。

（『イーブルナッツ』も今じゃ貴重なんだが仕方ない。早く『奴』を見つけ、倒さなければ……。）

少女の心情は内心穏やかではなかった。

「その負の感情……解放しろ……！」

その時、そんな声が聞こえた。

『負の感情』……。

女子高生の『負の感情』……それは、復讐したいという事ただ一つ。

チャリン……！

一瞬、女子高生は何かに縛られるような感覚に襲われた。

女子高生の体に吸い込まれるように『イーブルナッツ』が入ってい

った。

「あっ……。」

『どうしたの!!』

隣の友人が何か叫んでいる。

しかし、女子高生には何も聞こえない。

彼女の体に響くのは……何かがぶつかりあう音のみ。
そして、気付いた時には……、

『ニクイ……ニクイ……ニクイ……!』

女子高生の『復讐』という負の感情を具現化した物体が、彼女の影から現れた。

そう……負の感情の未確認生命体「魔獣」が……。

―海鳴市海岸―

『…第一種警戒態勢！！第一種警戒態勢！！学園内の生徒に告ぐ！』

『…第一種警戒態勢！！St・ヒルデ魔法学院の全生徒は、防護服を着用の上、講堂に集合！！』

『―繰り返す！！防護服を着用の上、講堂に集合！！』

『―第一種警戒態勢を維持せよ！！』

『…もう一度繰り返す！！全生徒は、防護服を着用の上、第一種警戒態勢を維持せよ！！』

「…そんな馬鹿な、ありえん…姿を消してたった数時間で」

「“どうやら”奴等”は、我等の創造を遥かに超える存在だったらしい……」

デパートに入ってから適当に買い物して、中を歩いていた。その時だ、急に寒気を感じた。そして突然近くのガラスが割れた。レイジは慌てて周囲を見渡す。

(~~~~~) ↑着メロ

「もしもし、ティードさん？」

こんな時にレイフォンが鳴る、ティードからだ。

『レイジくん。魔獣が現れた、至急急いでくれ!』

「わかりました、と・・・その前に。」

レイジは母なのなに電話をかける。

翠屋

「~~~~~」

キッチンで歌いながらの作業をやめ、電話に出るレイジの母。

『ごめん、今日遅くなるから。』

「あら、アリシアちゃんとデート楽しい? つふふふ。」

いつも如く自分の息子をからかう母

『だー! 違うって! とにかく、もう・・・切るな!』

ブツッ

「照れなくたっていいのに・・・。」

「いや、そうじゃないだろう? 母さん。」

レイジの兄、士朗は「この人は本当に・・・」とため息をついた。

「・・・アリシア、悪い。ここで待ってる!」

「レイジ君!？」

彼はアリシアに安全な場所で待機させると、レイジは駆け出し、

《sealing mode》

レイフォンを開き、エンターキーを押して、折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫ぶ!

「セットアップ!」

光輝く、フィンがレイジの周りを踊る。

《set up》

レイジの体は光に包まれた。光が消え去ると、そこにいたレイジの姿は変わっていた。

そして――

以前レイジを遠くから見ていた少女が”突然、地面に空いた穴”に、濁った宝石を投げ入れた。

「行きなさい・・・」

ザアアアア・・・

「ガッ！」

地面から、様々な形の鎧を着た、無数の傀儡兵のような魔獣が現れる。

——同時刻、デパート内

「あつ、いたいた・・・二人とも！」

「ふふつ、大好きな『お兄ちゃん』とデパートでデートできてよかったね、か・ず・は」

「なっ！？咲華つてば！べ、別にそんなんじゃ・・・！」

「隠さない♪ 隠さないの」

——ド「オシ」——

『！？』

「なんなの？」

——同時刻、別の場所

「い…なんだよこれ。」

「何だ！？何が起こってるんだ！？」

「これが未確認・・・”魔獣”か！？」

「ガアッ！」

ホクトが動揺する。ティードが指を指したところには、別の様々な形をした魔獣がわんさかと現れた。

「君は…無駄話をしているうちに、来たぞ！」

「……デイベインバスター！」

ドオン！

「くっ…こいつしづといなあ！」

「レイジか！」

「悪い、待たせた。2人は下がってくれ。」

フラッシュムーブでここまで飛んできたエクセリオン

「レイジ君、後は頼んだよ！」

「解りました！ティードさん、ホクト、はやくッ！」

その場にいた2人は、エクセリオンに任せて去っていった。

『グアアッ！』

「はっ！」

エクセリオンは傀儡魔獣の攻撃を回避し、蹴りを入れる。

「喰らえっ！」

そして魔獣の体を構成している宝石が飛び散る。

「はあああああ……」

エクセリオンは傀儡魔獣にアクセルスマッシュを叩き込む。

『グオオオオオオ！！！！』

「キャアツ・・・！」

「何？こいつら・・・」

「ハアアツ！」

ドオオオオオオン！！！！

『ギシャアアツ？！』

『ツ？！』

魔獣にエクセリオンの跳び蹴りがヒットし、魔獣はバウンドしながら遠くに飛ばされていった。突然現れたエクセリオンに3人は驚き警戒心を強める。

「き、君は…高町？」

「夏目ツ！？……話は後だ。とりあえず、その子達を避難させる。俺はあの未確認……”魔獣”を片付ける」

「わかった、2人とも……こつちだ」

「うん！」

エクセリオンの言う声を聞いて智春はエクセリオンに問いかけるが、エクセリオンはそれを聞かず2人の避難を指示、そして吹っ飛んでいった傀儡魔獣に殴りかかり、ある程度ダメージを与えた後、携帯型ツールへCVK792-Rと入力する。

「……これで！」

《Stahlmesser!!》

エンターを押すと同時に、リンブッカーを近接武器に変形させ、体勢を低く構ると、次の瞬間……それをフラッシュムーブで加速しながら突撃する。

「うおおおおつ！紫電・一閃！！」

ズバアアアアン！！

リンブッカーに電撃を纏わせて振り上げ、傀儡魔獣を真ん中から叩き斬った。だがこのまま突っ込んでいくのにも限界があると感じたエクセリオンは一度、傀儡魔獣から離れ再びリンブッカーを構える……

《Thunder Rage!!》

電子音声が響くと今度はリンブッカーをゆっくりと胸元まで持ち上げてから左手で受けの構えを取りながら、右にくるりと回りながら傀儡魔獣の攻撃を受け止める。

エクセリオンの左足が少しだけ下がり、砂煙が立つ。

そのままリンブッカーをガンモードに変形、撃った後にソードモードに変え、振りかぶって傀儡魔獣に叩き込む。

リンブッカーがくる直前、魔獣は自身の武器で受け止めるが、後方へと砂煙を焚き上げながら大きく下がってしまう。

魔獣を見据えたまま、エクセリオンはリンブッカーを下段に構える。

レイフォンをハーティアルローダーに接続、2つのツールのシステムが起動し始めた。

《Drive Ignition!!》

「飛竜一閃ッ!」

『ウボアッ!』

リンブッカーが告げると同時に、エクセリオンは上段に構えて蛇のような竜のような刃が見事に傀儡魔獣を貫き、後ろの魔獣も叫ぶ

間もなく吹っ飛んでいった。

魔獣はよろけながらもエクセリオンに向かって遅いかかる。

「火竜一閃っ！ハアアアアアッ！！」

『ウボアアアアア！？』

ドッゴオオオオオオオオオオオンッ！！

リンブッカーによる飛竜一閃と火竜一閃が炸裂し、魔獣達は纏めて爆発、濁った宝石となつて散り、傀儡魔獣のいた場所には刃の痕が地面に刻まれていたのであった。

エクセリオンがリンブッカーをほいっと上に投げると同時にレイフォンから《Remote Control》の音声とともに腰に戻る。

「片付いたか・・・」

「・・・アクセルシューター！」

「ッ！？」

エクセリオンは気配に気づく、冷たい声が周囲に響くと共に、彼のいた辺りに高速の無数の弾幕が襲い掛かった。

弾幕の豪雨を受けたその一帯が、瓦礫の山と化したのは言うまでもあるまい。

濛々と上がる砂煙の向こうから、大きい声が聞こえた。

「随分好き放題やってくれるな。それがお前の礼儀って奴か!？」

いきなりの攻撃、それも命に拘る破壊力の一撃だったのだから当然の態度だろう。

「生きていましたか、アレを受けて。やりますね、存外に」

だが、アクセルシューターを放った相手は特に取り合わず、感心したかの様な口調で答えた。

「まあな・・・てかお前は一体何者だ？」

煙が晴れ、姿が露になったエクセリオンが返した。あれだけの攻撃を浴びたにも拘らず体はおろかコンバットスーツにあまり傷が付いていない彼を見て、口元が僅かに動いた。

「説明する必要はありませんよ。貴方はココで死ぬのですから、」

「チッ!」

大きめの宝玉がついたフィンガーレスグローブを構え、冷酷な言葉と共にエクセリオンへと襲い掛かった。だがそこへ別の人物が現れる。眼鏡をかけた男だった

「大丈夫ですか?——様。あの方が呼んでいます。退いて下さい」

「そうか、済まない——・・・離脱する。」

「御意。」

「待てっ！」

エクセリオンが迫るが、次元転送の法陣が既に敷かれていた。

「また会いましょう。」

そう言い残し、男は消えた。

S t ・ s ・ 9 存在するはずのない謎の存在

次の日、翠屋

ティーダはレイジに「話したいことがある」といい、自宅・・・翠屋で話すことになった。約2名ついてくることになるが・・・。

「あつ、ティーダさん。」

「またせたね、じゃ中に入ろうか。」

「ごめんね、お話あるのに・・・。」

「いいよ、別に・・・。」

「ハハハ、てれっ」お前は帰れ。「おい！」

ティーダが声をかける、

「・・・そろそろ、中に入ろうか」

レイジはドアを開けた。

「いらっしゃいますっ」

中に入ると栗色の髪の毛の綺麗な女性が駆け寄ってきた。

「あら、アリシアちゃん」

「こんにちは、なのはさん」

互いに挨拶する、アリシアとなのは

「ただいま」

「うん、じゃ好きな席に座ってくれる？」

レイジの母親がそう言い・・・レイジ達はカウンター席に座った。
ホクトは店内を見て・・・

「お前ん家、本当いい店だなあ・・・。」

モダン・・・と言っのだろうか。とても落ち着く場所である。

「トオル。ほっぺについてるよ」

「るんちゃん、ここのケーキ美味しいね。」

「うん、クセになっちゃうね。」

窓際に、くせ毛があり前髪をあけておでこが見える少女と手が隠れるほど大きいセーターを着た少女が美味しそうにケーキを食べている・・・一方、

その2人の、少女がいる席の反対側にいる4人の少女...

一人は、金髪で長身の水色のワンピースを着た少女...

もう一人は、茶色い短髪で黄色のサロペットを着た少女...

もう一人は、黒い長髪で丈の長い、緑色のワンピースを着た少女。

そして、ピンク色の後ろにリング状になった髪に、顔は少々幼く背の低い髪と、同じ色のフリルの付いた

インバネコート風のワンピースを着ている少女...が楽しそうに話しながらケーキを食べている、そして・・・向こう側の席・・・。

「このケーキ、本当美味しいわね。」

「かがみん、ダイエットしてたんじゃない?」

「うつさい!皆まで言っな!」

くせ毛がある背の低い少女とツインテールの少女がモメていた。

「皆本、まだかよもう待ちくたびれちまった」

「そう言っな薫、後数分でできるそうだ」

「そうやで、薫少しの辛抱や」

「薫ちゃんのそうゆうせつかちな所、私は好きだけど」

「お兄ちゃん、あゝん」

「和葉、ここでちょっと・・・。」

「はい、トモ。あゝん」

「操緒まで・・・ウググ・・・!」

そう。なぜかクラスメートからは翠屋の話がよく聞かれる。アリシアはここに来てその理由がわかった。

「・・・人気がある訳ね。」

「メニューは決まったか？良かったら、奢るよ！」

レイジが奢ると言うつと、ホクトが割って入る。

「マジ？じゃあオレは・・・」

「お前じゃない！！」

「ケチ！」

レイジがホクトとモメる。

「うん。決まったよ」

アリシアが頷いたので・・・

「わかった。」

メニューをボタンと閉めるレイジ

「すみませ〜ん」

注文をするために声を出した。するとレイジの母親が来た。

「これとこれを・・・」

アリシアが注文する。

「うん、わかったわ。・・・刑事さんは？」

「肉体労働の後は甘いものに限る、ありがたく頂ます・・・ケーキセットで。」

見てるだけじゃんと心の中で突っ込むレイジ。

「レイジ君。ケーキと飲み物はいつものでいいのね？」

母、なのははレイジに問い掛ける。

「うん、頼むよ。」

「ちょっと待っててね」

なのははそう言って厨房へ向かっていった。

「・・・ティーダさん話してくれますか？」

「ああ。いずれ、君がやらなければならない・・・これからの事をね。」

ティーダにレイジが以前の話の続きを聞こうとする

「これからの事？」

「そう、近い将来”この世界”で大きな異変が起きる。近いといつてもすぐに起きる訳じゃないんだ。ただその大きな異変を君の力で阻止して欲しい。」

レイジはティーダに質問をする。

「（シャルルもいつてたな・・・。）何が起きるのかも分からない・・・それでもですか？」

「大丈夫さ。君なら分かるよ。”不屈の心”を持つ君なら・・・」

ニコツと笑いながら、ティードは言う。

「あの・・・もう一度、未確認の事も教えてくれませんか？」

「・・・奴等の名は”魔獣”・・・違法魔導師が”イーブルナッツ”を使って生み出したモノだ。」

しかし、レイジはまだ知らなかった・・・”異世界というキーワード”を通じて、全世界最大であり未曾有の危機と同時に何者かが動き出したという事に・・・

その後、

「ねえ、アリシアちゃんはレイジ君の事・・・どう思う？」

「はう！いや、あの、その・・・。」

自分の子供だけでは飽き足らず、ガールフレンド（？）までからかう。

「まあ、あの子は顔もそれなりにいいし料理等家事全般出来るし・
・男としてこれ程の物件はそうそうないでしょうね・・・ちょっと、
鈍感だけど。」

その言葉に、アリシアはピクリと反応する。

「あの、それって？」

なのははアリシアの額を優しく小突いて、

「女の子ならしっかりと自分を磨きなさい」

（ふえ……………）

レイジの母の顔はニコリとしていたが、その言葉はアリシアの心に『楔』としてしっかりと打ち込まれたのだった・・・。

St・s・10 束の間の休息？

放課後に魔獣を片付け、帰宅するレイジ。

「さて、帰って飯食うか……」

そう言いながら店の入り口から入ると、彼の目の前……。

「いらっしやいませ！」

「え、え？」

アリシアが黒いリボン、金色のツインテールでウェイトレス服を着ている……少し露出していて、可愛い服だ。

「お……お前、なにしてん」アリシアちゃん、今日からうちで働く事になったのよ」……母さん。」

アリシアが目を輝かせて言う。

「ご注文は？」

「えーと……じゃあケーキセット。」

「かしこまりましたー！」

暫くすると……アリシアがお皿に乗ったショートケーキとティーカップに入った紅茶を持ってきた。

「お待たせしました。」

「…いつから翠屋はメイド喫茶になった？」「ウェイトレスよ。」
「…あれ、ウェイトレス服の域を越えてるだろ？あの服！」

レイジはフォークでケーキを刺し、切り分けて食べる。

シェフ並みとはいかないが…生クリームにトッピングは彩り、味は濃厚な上に甘さひかえめで、なかなかおいしい。

「これ、誰が作った？」

「それはね…私が教えて、アリシアちゃんが作ったのよ…美味しいでしょ？」

「その…どう？」

「ああ、お前料理得意だもんな。ケーキも作れるとは知らなかった。
…うん、んまい！」

「ちょっと、レイジ君！」

母が怒るが、無視し…紅茶を啜ると、あることに気付く。

「…これは？」

「…うん、ティードさんに。」

「やっぱりな……。」

レイジは紅茶を再び口に含み、飲み干した。

「……ご馳走様でしたと……。」

時計を見ると、もうじき、8時を廻る。

「お疲れ様でした。」

「うん、お疲れ様。レイジ君、家に送ってあげなさい。」

レイジは立ち上がり。

「……わかったよ。」

「あら、素直ね。どういう風の吹き回しかな？」

「まあな、母さんに似てお節介だからさ……俺。」

実際は魔獣が出現する危険を考えたからである。

次の日、

「はぁ……疲れた……。」

魔獣退治を終えたレイジは、溜息混じりに呟きながら帰路についていた。

今日は特に忙しい一日だった。洛芦和高校までいたり、桜才学

園まではしつたり…。他にも色々あった気がするが、考えるだけでも疲労感がどつと来そうなのでやめておく。

「帰ったらそのまま寝るか…」

お風呂は明日起きてからでもいいだろうと考えつつ、自室の前に到着する。そして、扉を開けて中に入ると、寝室へと向かい、レイトンを机の上に置いてそのまま倒れこむようにベッドの上に身体を投げ出す。

「寝よう…」

目を閉じると、程なくしてレイジは眠りへと落ちていった。

翌日、

「……ん？」

目を覚まし、ベッドから起き上がると・・・未だに覚醒しきれてない意識の中、ゆっくりと頭を動かしてあたりを見渡した。窓から差し込んでくる朝日が部屋の中を照らし、鳥の鳴き声が聞こえてくる。

「朝…か」

もそもそと緩慢な動きでベッドから起き上がり、風呂場へと向かい、風呂場に着くと服を脱いで洗濯機の中に放り込み、中に入っただバツと入って、すぐに出る。

身体に感じた汗による不快感も解消され、寝ぼけていた意識も覚醒していく。その後、身体を拭いて服を着替えた。

「そういえば…」

そんな中、何やら良い匂いがただよってくると、同時に台所の辺りから香ばしい香りがかすかに匂ってきた。

「……」

台所の方へと向かうと、そこにいたのはアリシアだった。ただ、鼻歌を交えて嬉しそうに朝食の準備を進める彼女の服装は”普通の私服にエプロン”だった。

「……」

目の前の状況に思考が追いつかないレイジ。何故彼女が自分の家に来て朝食を作っているのか…。

そんな事を考えつつも、まじまじとアリシアの格好を見やる。彼女が着ている私服は、スカートが短めだが・・・飾りもないので落ち着いた印象が強い。

「あら～・・・どうしたの？」

後ろから、女性に声をかけられる。

「!？ り、凜さん!？」

後ろにいたのは、レイジの”義姉・凜”だった。

「やつほゝあの子、彼女？」

声に気づいたアリシアも、そちらに振り向くと柔らかな笑みを浮かべながら言葉を返し、レイジも答える。

「…違う（います）。」

「ふゝん・・・ま、いいわ。私仕事行くね！」

そう言うと、ニコツとしながら凜は出かけていった。

レイジはアリシアに聞きたい事があったのだが・・・とりあえず、ソファに座ってレイフォンを操作する。少しして視線を少しだけ動かしてみると、テーブルの上に並べられていた。

「口に合うといいけど…」

レイフォンをセーブモードにすると、ソファから立ち上がり、そちらへと向かう。そこにはホットサンドイッチとスクランブルエッグが並べられている。

「じゃあ・・・」

早速食べてみる。

「……」

余計なことを言わずに黙々と食べる。

「ど、どうかな…」

「うん、美味いんだけど・・・。」

食事を取りながら、彼はこの状況で、

「????」

「…母さん達の姿がみE「レイジ君が起きる前に旅行に行っちゃったみたいなの。」って!?!まじかよ!!」

ようやく疑問に思っていた事を口に出したレイジだが・・・それを聞いて、返ってきた言葉は・・・。

「…店番、お願いって・・・。」

「バツカヤロ・・・!」

書置きを見ながら悪態をつくレイジを見て、アリシアは心配そうな顔をしていた

St・s・i1 ACEの力

乱雑に人形が積まれた空間が広がる不気味な世界。

『コノ空間ノ中デハ我々ノ能力ハ3倍ニ増幅スル・・・キハハハハハ！』

玩具のようなものもあり、まるで小さな少女の夢を具現化したような世界だ。

しかし…

「知るか！今すぐ、片付けてやる！！」

《Acceler Fin》

彼が、構えをとると、両手両足にフィンが発生する。

その視線の先には足の長いダイニングテーブルと椅子が置かれている。

「油断すんな、レイジ！！」

物陰に隠れていたホクトが虚空に指を刺しエクセリオンに叫ぶ。

そして、その椅子に徐々に光の粒子が集まり一つの形を形成していく。

そこに現れたのは、まるで不気味な人形のような生き物（？）だっ

た。

ホラー映画などに出てきても不自然ではないとても不気味な姿をしている。

しかし、その時先ほどのホクトの隠れていた物陰の隣に少女がいた。

「レイジ君……。」

そして、エクセリオンは”不気味な人形”形の魔獣を椅子から落とした！

「せっかくの所悪いが、一気に決める！」

そう言う和不気味な人形をリンブッカーで思いっきり殴り、はるか数十メートルは先にある壁に叩きつけた！

しかし、それだけで終わるわけではない。

『無駄無駄ア！！』

エクセリオンが魔獣目掛けて突進し、その体が宙に舞う。

《Strike Driver》

「はあっ！！」

空中へ飛び上がって強烈な飛び蹴りを放つと”魔獣”の体が吹き飛ば

・・・だがその瞬間、彼に一瞬の隙が生まれた。

「コイツッ!？」

魔獣の口から巨大な蛇のような『恵方巻き』が現れ、エクセリオンに近づいていく。

『ギハアッ!』

大きな口を開け、今にも彼に食らいつこうとしている。

「レイジッ…!」

「イヤアアッ!-!」

永遠にも感じられる一瞬が続く。

その『恵方巻き』が彼に食らいつこうとしたその瞬間…

《Fake Silhouette》

直後に電子音が鳴り響く。

パアアアアアアン！！！！

空中で盛大な爆発を起こし、その『恵方巻き』は地面へと落ちてくる。

「いったい何が起こったんだ…？」

エクセリオンに再び『恵方巻き』が襲い掛かる。

だが彼はその攻撃を交わし、『恵方巻き』と戦いを繰り広げる。

「ジェットステップ&ギガントナックル！！」

『恵方巻き』の攻撃はエクセリオンに全く通用しない。

それどころか、彼の繰り出すパンチやキックが、圧倒的な攻撃力で次々に『恵方巻き』に炸裂する。

エクセリオンの攻撃が次第に『恵方巻き』を追い詰めてゆく。

さらにエクセリオンはリインブッカーをガンモードに切り替え、『恵方巻き』目掛けて乱射すると直撃、

「……全開で叩く！」

レイフォンをハーティアルローダーに接続、2つのツールのシステムが起動し始めた。

《Drive Ignition! Excillion Buster!》

仕上げと言わんばかりに、エクセリオンは持っていたリインブッカーにエネルギーをチャージ！最後の特技を『恵方巻き』に炸裂！

「エクセリオン・バスター！」

その一撃はまるで超一流のスナイバーのごとく正確に、『恵方巻き』を打ち抜いた。

『うばああああッ！！』

地面に倒れ伏したまましぶとくもがくが、爆発し跡形もなくなってしまう。

エクセリオン達が現実世界に戻る。

「おっと、”素手”だと、あぶないな・・・」

戦いが終わり、レイフォンへと手をかけるが地面に落ちているロス

トロギアを見て、その手を止める。

St・s・12 約束された勝利の法鎧

海鳴市のどこか。

レイジがレイフォンのエンターキーを押すと光りだす。

《sealing mode》

折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫んだ！！

「セットアップ！」

《set up》

そう言った時、光輝く、フィンが彼の周りを踊り、体が光を発し、そして目を開けられないほどの輝きを発生したのだった…

彼の体が光輝くフィンが全身を覆い、装甲となつての体に装着され、鋭いイルカヘッドのような形の幻影がヘルメットとなつて頭部に形成され、光が消え去ると姿は変わっていた。

……まさかこれが原因でこんな事が起こってしまうとは…なぜ、こんな事になってしまったと彼は頭を抱えることになる。

数分前・海鳴市

それは平穩の筈だった

特に理由もなく、只の暇つぶしの筈だった

「おい、レイジこれ見てみろよ」

「なんだ？……これは…未確認……いや、違う！」

ホクトは暇潰しで見つけたネットのとあるサイトに
興味を惹かれていた……理由はそこにはまるで
見ていた様にティードから聞いた”ミッドチルダの過去”と似た様な
事件を始めた数々の物語があった
違う点があるとすれば……

「そういえばこれ…この人、なのはさんに似てないか？」

ディスプレイに映っているのは、白い服にジャケット、前が開いた
スカートを着ていて手には先端が金色で赤い宝石がついた杖のよう
な物をもっている女性だ。

「所詮は他人の空似みたいなもんだろ？大体、この人若いし……つと……そろそろ今日の晩飯の買い出しに行って来ねえとな……アリシア、手伝ってくれるか？」

「うん、いいよ。」

そういつて、此所で買い物に行く為にそのサイトを見るのを止めて、玄関から外に出て買い物に行く……………

「筈だったんだよね……何がどうなってやがんだ？」

その後、玄関潜って外に出た筈が

「しかも、アリシアまで居なくなってるし……」

何故か空軍の基地と同じような作りをした場所に出る。

ズドオオオオン！！

激しい揺れと同時に地面が揺れる。

レイジ達は「魔獣」の元へと向かおうとしていた。しかし、彼は何故か足を止め…

『レイ……ジ君……どこにいるの?』

レイフォンから、シャルルの声が聞こえたからだ、

「……シャルルなのか?」

『……その様子だと、君はゲートを通って”別の世界”に行っちゃったみたいだね……?』

「ゲート? 別、世界? ……???’」

『とにかく……戻れるように、ゲートを開けるから、それまで少し待ってて。』

（このようにすくいなんてない…）

暗くもなく、明るくもない部屋で、少年は悟る。

悟ってしまっていた。

（せいぎのみかたなんていない…）

少年の後ろに長い純白の髪、燃えるように鮮やかな赤い髪先、透き通るような翡翠色の瞳の少女がいた。

「…誰？」

「面白い、貴方のその負の感情…貰い受けます。」

突然、少年の体に『イーブルナッツ』を投入した…。

チャリン…！！

彼の影が大きく膨らんだ瞬間、

ゴオオオオオオオオツ！

現れたのは巨大な炎の塊…しかし、それは、ただの炎の塊ではなか

った。

真紅に燃え盛る炎の中で、重油のような黒くドロドロしたモノが存在し、炎の巨人が現れる。

「ひいいい!？」

驚く少年。少女は巨人に指示をする、

「お行きなさい」

…ここは別の場所……

「…デコイツ! もう一丁いくぞ!！」

「はあっ!! !？」

…少女たちは触手のような物をかわし、「未確認生命体」に攻撃を加える。だが…

「…な、何よ!! これ!？」

「腕にくつついた……!？」

「!？ あ…ああああッ!!!!!!」

「な…！？何ッ！？」

触手の様な物が次々と襲い掛かり、その攻撃に苦戦を強いられていた。

「う……うわ…ッ…！」

「っ…！？」

「あゝ ああぁっ…！」

『た、ターゲット1が未確認の攻撃パターンを繰り出しました…！』

「何だと…！？」

『くっそやべエな…こいつあたしより力が強え…』

画面の前に移る未確認の攻撃に、司令部の人間たちはただ見ているだけしか出来なかった。

「フウンッ!!」

未確認が襲い掛かってくるが、少女達は素早く避ける

「ちっ…しつこいんだよ!! テメエもよ!!」

「ふん、君の武器は飾りかな？」

未確認は自分の身体が武器の様に鋭くなっているのにも関わらず、何やら青の触手の様な物を振り回している…が、

「あッ…!」

「な? な…によ…!? これ…!!?」

触手の様なものから電気が流れ、喰らった少女達は倒れる。

「く……!!」

「うっうっ!! ……うおおおー!! ……」

大型の刃が未確認に突き刺さる。

ドオオオオン!

『ターゲット1が沈黙? やった…いや、生きてるッ!?』

「こ、こいつは一体？」

『なんなのー！私、聞いてない！』

「こいつら、また何か異様なことをやり始めたらしい！」

「聞きました！先輩ー！！」

「ど・・・どうすれば・・・！？」

「どうって・・・決まってるでしょう・・・？」

……別働第二小隊隊長である彼女達は言った。

「・・・とことんやるしかないじゃないのー！！」

『？ー！』

「デコイー！！！！行けッ！！」

少女の叫びと共に隊員達は一斉に未確認に飛び掛かる！

「はいッー！」

「私たちも行くよー！！」

『ソニッククムーブー！！』

「あれさえ壊せばー！！」

回避不能なほど、無数の触手が少女達に襲い掛かる。

「うぁー!!」

「先輩!？」

「ちいつ……こなくそ……」

捕まってしまう少女。

「逃げて……貴方達だけでも!!」

「諦めるのはまだ早えよ」

「え？」

その瞬間だった、ふと背後からの声がしたかと思うと次には

あの未確認と触手が何かに撃ち抜かれた様に吹っ飛んだ。

「……先輩!お怪我は？」

「…ええ、大丈夫。けど……………ッ！」

「大丈夫か？」

「誰？」

「げぼげぼっ……………何者……………」

そう小隊の2人が質問すると。仮面の男が”どこかで聞いたことのある台詞”を言い放つ。

「ただの通りすがりのメタルヒーローだ。覚えておけ…。」

「メタ…？それじゃあハッキリ言っわよ。貴方、この場から離れなさい！すごく危険だから。」

「…危ない状態なのはお前達の方だ、怪我人達を連れて、とつとこの場から退散しろ！」

『後は、僕達に任せて。さあ！』

変なスーツを着た男が現れ、何処かから聞こえる念話に小隊メンバーは唖然とした表情で立っていたのだった。

「……………わかったわ。」

「いいんですか？……先輩……こんな奴のいう事。」

「……彼に任せてみましょう、只者じゃないって事は見ればわかるから。」

「ガアアアアアアアアッ！！！」

「くっ……そんなんで倒そうだなんで、ずいぶんふざけてるんだな？」

魔獣は電撃を纏った触手でエクセリオンの頭部を狙い打ちしたが、あまり効いていない。

「フッ！ハアアッ！！！」

エクセリオンは魔獣の爆撃をリンブッカーで防ぎながらソードモードにして、柄を強く握りしめる。

そして、魔獣の間合いに入った瞬間、全身全霊で振り下ろす。

「おおおおおあああああ！！！！！」

翠に輝く刃が魔獣を肩から斜めに斬る。

St・s・12 約束された勝利の法鎧（後書き）

エクセリオンの設定

コンバットスーツ

基本カラーは白で、複眼の色は桜色。高町レイジがレイフォンを使い、スーツ装着コード《set up》を発することによって、レイフォン内に圧縮収納され、微粒子状に分解された桜色、黒、金色の”フィン形特殊軽合金”が体に吹き付けられるようにスーツを構成していき、セットアップが完了する。この一連のプロセスは0.03秒間で完了する。金色のメタルと青いシールドコーティングで構成されている。セットアップが完了すると全身の力がパワーアップする。異次元や宇宙空間でも活動可能。

ツール

レイフォン

携帯電話型トランスジェネレーター。レイジをエクセリオンへと変身させるほか、通常の携帯電話のようににも使用できる。形は折り畳み型。閉じた状態は音叉状を模ったデザインになっており、開いて「CVK792-」+エンターの順にキーを押すと、《mode》の音声が発声されて待機音が鳴る。本体を閉じ、赤い部分に手をかざすと音声を発し、レイフォンに埋め込まれた「トリックスター」と呼ばれる秘石のエネルギーを動力源として、同時に紋章が投影されて効果を発揮する。

リンブッカー

左腰に携行されるI PAD型の専用ツール。内部はクラインの壺へと通じており、ここにロストログアを無尽蔵に貯蓄できる。I PAD型の魔導書モード、ガンモード、ソードモードの3形態をとる。

デバイス

様々なエネルギーを2次元の世界に封じ込めたリインブッカーに収納されており、レイフォンにパスワードを入力することで封じられたエネルギーを解放し、各々の効果を発揮することができ、魔導師の記憶「魔導端末に記録された術技」の呼び出しができる。リインブッカーから発動する際、稀に「魔法のステッキ」（満点大笑）のような効果音が鳴る。またエクセリオンが直接ブッカーから取り出す場合もあれば、デバイス自体がエクセリオンの手元に飛んでくることもある。

ドライブイグニッション

エクセリオンの攻撃S+の術技を放つときの電子音声。

ハーティアルローダー

携帯電話型トランスジェネレーター”レイフォン”の機能を拡張する為のアドバンスドツール。

エクスレイバスター

ヘッドが音叉状型のエネルギー砲。使用時にはリインブッカーを用いて召喚する。レバーを引くことでブームが多少伸び、光の羽根を広げる。「ギガイグニッション」の電子音声と共に収束し、桜色のエネルギー弾を放つ「スターライトブレイカー」が必殺技。

スーパーセットアップ

エクセリオンには、戦況に合わせてコンバットスーツの性能を変化させるスーパーセットアップという常識を覆すシステムを搭載している。スーパーセットアップは装着者の意思にリンクして超変身を行うシステムでこれによって、機動性を重視したアグレッサ、格闘能力をさらに向上させたセイクリッド等、自在に姿を変える。スーパーセットアップ自体は瞬時に行われ、かつ連続してスーパーセットアップすることも可能。しかし、体力の消耗が激しく、しばらくすると元へ戻ってしまう（ハーティアルローダーを使うことにより、負担軽減）。

アグレッサモード

エクセリオンがスーパーセットアップした姿のうち一つ。

エクセリオンの高速戦闘形態。カラーリングはネイビーブルーとブラック。エクセリオンがスーパーセットアップした姿の中で運動性能S+を誇り、最高速度420km/hを叩き出す。しかし、高性能に追求する過程で、攻撃力の面では他の形態に比べると芳しくない。

セイクリッドモード

エクセリオンがスーパーセットアップした姿のうち一つ。

機動力特化のアグレッサモードと反対にこの形態は機動力を犠牲に攻撃力・防御力に特化した形態。両腕にはレイジングナックルを装備。また、AMFやゼロエフェクトに対抗する為に造られており、デバインド・ゼロの直撃にも耐える。パワーもエクセリオン3形態

中最高。

これにより絶大な攻撃力と防御力を実現。これらの武装で負担が増加した上、膨大なエネルギーを消費するため稼働時間は短い方。

ブラスタ―

エクセリオンがスーパーセットアップした姿のうち一つ。

航空魔導師用の総合支援ユニット。「砲戦用の大型粒子砲」「中距離戦用プラズマ砲」「近接近用実体剣」を内蔵した「フォートレス」と「ストライクカノン」を改良された「エクスレイバスター」を装備した形態。

エクシード

エクセリオンのスーパーセットアップした姿のうち一つ。

全てに特化した形態で、超近距離格闘戦、最高速度も向上している。スーツの噴射口から噴出した粒子と虹色のフィンによって飛翔し、時速560km/hと言う圧倒的な機動力と速度による、「ACSDライバー」が必殺技。

St・s・13 アルティメットX

海鳴市に存在する『ヴォルケンリッター社』。

ネットワーク世界を監視する事も出来る彼らは未確認生命体”魔獣”の存在をいち早く察知することができる。

今、その施設内ではかつてないほどの巨大な力の接近を確認していた。

「八神社長！海鳴市のウォーターワールド近くでとてつもない力の”未確認生命体”が”こちら側”に来ようとしています！」

オペレーターの方が叫ぶ。

モニターに表示されている”未確認生命体”の姿からはとてつもないエネルギーを感じる。

それは、レイジ達がこのあいだまで戦っていた物とは比べ物にならないほど巨大なものだった。

「なんやて！？どうにかできないんか！？」

八神一郎が叫ぶも、この強大な力を持つ”未確認生命体”の前に彼らはなす術もなかった。

やがてその”未確認生命体”世界の狭間を抜ける。
しかし…

「なんやてッ…！どう言う事や？」

”未確認生命体”の反応がぱったりと消えてしまった。
通常なら、若干の反応は残るはず。そのためこのようにまったくの反応がなくなるというのは理解できない現象だ。それはまるで何かに隠されているように反応が消えてしまった…

一方その頃、街外れの風力発電所で、とある異常事態が起きていた。

発電した電気や溜めてある電気が次々と消滅するという怪事件だ。

さらに、セキリユティシステムまで何者かに乗っ取られている。

しかも、この風力発電所は無人の施設のためこのことが誰にも気づかれていない。

一体この事件を起こしているのは誰なのか…

同じころ頃、海鳴市に、爆発音が、大地を揺らすような足音が、風力発電所の機能が完全に停止し街への送電が止まる。海鳴市一帯は停電へと追い込まれてしまった。

が、その直後、ビルのガラスが砕け、中から何かが飛び出してきた。

「デイバイイイイン…バスタアアア！」

飛び出してきたのは、自身の正面に水色のスフィアを形成したエ

クセリオンだった。

・・・その後、目の前に男が現れる。

互に向かい合い、鋭い眼光でこれから闘う相手を睨み付けていた。

「今現在で69億人、しかも、4秒に10人ずつ増え続けている君たちが、どうして単一個体の生き死ににそこまで大騒ぎするんだい？」

つめたい瞳がこちらを射竦める。笑み小悪魔の様な感覚を与えた。

「何が言いたい・・・？」

エクセリオンは目の前の、人の皮を被った異形に警戒したまま問い返した。

「勘違いしないで欲しいんだが・・・簡単な話だ。僕らは何も、君達人類に対して悪意を持っている訳じゃない・・・全ては、全世界の寿命を伸ばすためなんだ・・・。」

「・・・で？」

「僕らの邪魔をしないでくれる？」

エクセリオンと悠然と構える男の間に沈黙が流れた。音無きその空間が暫く保たれた後、均衡を破る答えが放たれた。

「悪いけど・・・それはパス」

力強く返された答えに、男がふくと漏らした。

（面白い奴・・・。）

「俺は『お前ら』を止めなくちゃならない。お前の様なヤツらをほつとくと罪のない人が死んでいくからな」

エクセリオンの勘が確かなら、眼前の相手は只者ではない。最悪、返り討ちにあつてもおかしくはない・・・ここで逃げていたのでは、いつまで経つても『兄や父』には届かない。自分は『乗り越えねばならない』。

―自分の様なごく普通の高校生に夢を託してくれた親友や、仲間を守るために。

「来いよ！」

決意と共に、エクセリオンは超えるべき敵ヘリインブッカーを構えた。そんな彼を見て、男がポツリと呟いた。

「ふん、噛み殺してあげるよ！」

その瞬間、男の姿が『消え』、いきなり目の前に現れた。そして真っ直ぐにその腕をエクセリオンの胸へと突き出して来た。

「！？クッ！」

「フォトンランサー！」

一つの塊にして撃ち出した波動弾がエクセリオンに叩き込まれる
！！！！

ドッ、ドドン！ドンドンドンドンッ！！

「ぐああああっ！？」

命中した瞬間、凄まじい攻撃により、エクセリオンは砲弾の如く吹っ飛ばされて数十メートル先の壁に叩き付けられた。

（何だ・・・今は・・・！？）

「あああああっ！！」

気合とともにエクセリオンへ袈裟斬りの斬撃を男は放つが、エクセリオンはそれを後ろへ体を動かして紙一重の間合いで躲し、半歩前に出て、横薙ぎに払い、カウンターの一撃のような斬撃を放つ。

「チッ！」

しかし、男はエクセリオンの斬撃を自分がやられたのと同じようにわずかに顔を後ろへ動かして攻撃を避けると、そのままの勢いを持って切り上げの斬撃を放った。

自分の剣を躲しながらの一撃だったため、エクセリオンは一瞬焦ってしまった。

（守ったら負ける……その取り回しの良さを活かした連続した斬撃と刺突……しかも、どちらか一方が攻めに向かう時も、もう一方は護りの体勢を崩さない……なるほど、確かにこれは理想的な戦い方

の一つではあるよな……)

だが、それでも紙一重で斬り上がって来る斬撃を後方へ跳んで躲し、二人は再び間合いをとった。

と、次の瞬間。脇構えの体勢から振り払われた剣から発生したのは雷の刃。

「へっ……随分と面白エ技を持つてるんだね」

「何……!?!」

だが、いつまでも膠着状態という訳にも行かず、今度は男が息をもつかせぬ速さでエクセリオンを攻め立てる。

「ぐう……っ!!!!」

バランスを崩しながらも剣を構え、強い闘志を秘めた瞳でこちらを見据えるエクセリオン。

「分かった……お前の動き、攻略法をな」

「あはは？」

男は眉を顰めながら、淡々と喋るエクセリオンを見た。

そして、エクセリオンはレイフオンを取り出し、ボタンを押す、

《Sacred Mode》

音声を発したあと、何者かは何かのツールを構える。

「セットアップ!!」

2つのツールを接続。

《Sacred・set up!!》

エクセリオンの叫び、レイフォンの音声と共に、金色のフィンに包まれ、光を発する。

「!？」

エクセリオンがセイクリッドモードに強化変身。

「良いね・・・キミ」

その表情を狂笑に歪め、本当に嬉しそうに呟いた。

「つぶしてあげるよぉ・・・!!」

すぐさま防御体勢を整えたエクセリオンに、男は満足そうな笑みを浮かべると、地面を蹴って一気に間合いを詰める。

そして、エクセリオンが自分の間合いへ入った瞬間、男は後ろへ大きく振りかぶっていたディフェンダーを弧を描くようにして振り落とした。

ガンッ!!

「くっ!？」

ぶつかりあったとは思えないほど、重厚な剣戟音が響き渡り二人の武器が宙を漂った。

男の放った強烈な振り下ろしの一撃を咄嗟に防いだエクセリオンだったが、その衝撃は一撃で腕を痺れさせ、握力の大半を奪い去った。

（高速移動による体重移動と遠心力を掛け合わせた一撃か!？）

痺れる腕に顔を顰めながらもエクセリオンはどういった技なのか冷静に判断していた。

バルディッシュを避けられた男は少なからず動揺するが、すぐさま剣を振り上げて追撃を加える。

それが功を奏したのか、男の刃を見失わずに、すぐさま振り下ろされ一瞬で武器を捌かれた……

「……フラッシュムーブ!」

「ごあ……ッ!？（何故……!? 僕の……それにヤツが繰り出したのは剣を振っただけの唯の斬撃だぞ!? 何でダメージを受けるの!?!）」

困惑する男の耳に、エクセリオンの声が響く。

「ふッ……どうやら……思った通り……だったようだ……」

「！」

少しダルそうな感じで、

「何・・・？キミ・・・何を・・・したの・・・！？」

「分の悪い賭けだ！！」

真後ろに現れたオーロラを見て、男は忌々しそうに呟いた。

「忌々しいが認めてあげるよ・・・。まったく、忌々しい、人間とは悪魔の種族だよ・・・おいで、イノケンティウス！！」

男が宝石を投げると、巨大な生命体が現れる。

「あはは。じゃあね！」

オーロラに呑み込まれながらそう告げると、男はその場から姿を消した。

「な、…コイツツ！？」

エクセリオンの前には巨大な姿があった。血で塗られたような真っ赤な巨体の未確認生命体。

直後、巨体が動き、急加速して右脚で踏み込むと同時に右腕で一気に入ストレートを叩き込んだ。

「うわああああっ！？」

強靱な腕による鉄拳をまともに受けたエクセリオンは宙に浮きあ

がり、十数メートル後方の地面に叩き付けられると、強化変身が解ける。

「う…ぐッ…！」

「レイジ君！…相手は普通じゃない。他の攻撃パターンも考えたほうがいい…。同じパターンだけではいずれ対策をとられるぞ！」

「そこで、ババーンってやれよ！」

「…コホン、それもどうかと…」

ティード、ホクト、シャルルがゴチャゴチャうるさいと、エクセリオンは、

「だあああ！ごちゃごちゃうつさい！外野！！！」

《Luftmesser》

ーブウンッ…ドゴオオオンッー

エクセリオンが振りかざしたリンブッカーを未確認はかるうじて避けるが、その反動で近くにあった柱が木っ端微塵に碎かれ、破片が視界を奪い…。

《Revolver Shoot》

「リボルバーシュート！」

光弾は未確認の胸部装甲の全く同じ箇所全弾命中し、装甲に僅かに亀裂が入った。

「やったか?!」

「みんな、退がれ！」

「ああ！」

エクセリオンに言われ後ろに下がる2人

《Accelerate》

彼が、構えをとると、両手両足にフィンを展開、蹴り上げてビルに向かって高々と跳躍する。

「拙い、レイジー！」

ズダダダダ！！

未確認の銃口から勢い良く数十発の弾丸がエクセリオンに向けて放たれた。不意打ちだったため、回避行動が取れない。

「ぐあつ！！」

数十発の弾丸を受け、エクセリオンは十数メートル離れたビルに激突。壁にヒビが入った。

「レイジ君ッ！」

近くで見ていたシャルルが声を上げた瞬間、巨大未確認がすぐ後ろに迫っていた。

回避も防御も間に合わない。まさに万事休すだ。

（くっ…ヤッバ…！？）

その時だった。直後、上空から巨大な何かが飛び出してきた。

『グオオオオオン！』

「あ、あれは…！？」

飛び出してきたのは、通常よりもやや大柄なライオンだった。ライオンは目の前の巨大未確認の頭部に喰らい付き、投げ飛ばす。

『グオオオオオン！』

「セイオウ？」

ライオンが吼えると同時に、突然・複眼が発光し、聖王のゆりかごと書かれた絵に上書きされるように巨人の情報が投影される。

St・s・14 獅子アイボウ

突如現れた、謎の”巨大獅子形” 未確認。

ライオンは巨大未確認に体当たりした後、エクセリオンの方に振り向く。

「こ…コイツは一体…!?」

まともな装甲を纏っていない上に体がボロボロだが、それでも堂々とした姿にエクセリオンは目を奪われていた。

「もしかして、一緒に戦ってくれるのか!？」

『ゴオオオオオ!…!』

エクセリオンのその言葉に答えるかの様にライオンは吼える。

「よし!…!」

エクセリオンはライオンのコクピットらしき場所に到着した。ゆったりと、リクライニングなコックピットになっている座席に座り、操縦桿を握る。エクセリオンはその瞬間に、この機体の溢れる力を感じ取った。

「コイツは…いけるぞ!」

エクセリオンは機体を起動させ、中央の画面に『星桜』の文字が

浮かび上がる。

「セイオウ星桜… か！頼むぜ！」

スラスターを噴かせ、驚異的な瞬発力で巨大未確認に迫る。そのまま巨大未確認の腹に、思いつきり頭突きを食らわせた。

突然の攻撃に、一瞬ふらつく巨大未確認。すぐに体勢を立て直すと、『星桜』の方を向く。

「これ以上は、やらせない！」

『星桜』の体が輝き始め、鬣は金、前半身は白、後半身はダークブルーに、瞳の色が左右で異なる虹彩異色（右目が緑、左目が赤）に変わる。

『ゴオオオオオオ！！！！』

上空に飛び上がり巨大未確認に体当たりする『星桜』。すさまじい戦いが始まった…。『星桜』が一方的に巨大未確認を攻撃。さらに後ろ足で2ど蹴りを食らわせる。

「らあッ！！」

『星桜』は巨大未確認に向けて突進し、飛び掛る。巨大未確認は微動だにせず、『星桜』の首に自分の大蛇のような尻尾を巻きつけて苦しみ、地面に叩きつける

『ゴオオオオオオ！！！！』

さらに左腕の爪で攻撃。これをかわし、逆に巨大未確認を叩き伏せるが、相手は起き上がり・・・『星桜』を引き付けている。

『星桜』の画面には『トランスフォーム』の文字が浮かびあがり、何かの接続部分が現れる。

「『トランスフォーム』！！・・・お前、単体で変形できるのか！？これは接続部・・・こいつを使うのか？！」

エクセリオンが接続部分にハーティアルローダーを接続、すると縦席がパイロットの思考をダイレクトに機体に伝え、搭乗者の動きがトレースされるシステムに組み換わり、メカライオンの姿から、人型の形態へと変わる。

「『セイオウグレート』！全力全開！！」

『セイオウグレート』が前進すると、巨大未確認もそれに対抗すべく前進し、『セイオウグレート』が突き出した両手と掴み合いになり、双方の力が拮抗して動きが止まるが・・・『セイオウグレート』は巨大未確認を突き飛ばし、ラッシュをかける。

『セイオウグレート』のパワフルな攻撃が、巨大未確認に次々に炸裂。

巨大未確認が反撃にかかるが、『セイオウグレート』はことごとくかわす。

しかし、巨大未確認が口から吐いた火炎が『セイオウグレート』を直撃。

姿勢を崩した『セイオウグレート』に、巨大未確認が攻撃を浴びせる。

「くっ…おおおッ！調子に乗るなよ！」

渾身の力で、自分を踏みつけようとする巨大未確認を跳ね飛ばす。

『セイオウグレート』が反撃を開始し、巨大未確認を投げ飛ばす。

「デカけりやいって問題じゃないッ！！」

『セイオウグレート』は巨大未確認に突っ込み、怯んだ所で距離を縮める。

『セイオウグレート』は巨大未確認を放り投げ湖へ沈ませる。

「！！」

赤い玉となって逃げ出そうとする巨大未確認。

『チェーンバインド！！』

すかさず「チェーンバインド」で赤い玉を拘束する『セイオウグレート』。

「フラッシュインパクト！！」

赤い玉から巨大未確認に戻り、胸部にセイオウグレートの拳が直撃した。

『グギヤアアアア!!?』

巨大未確認の装甲が、まるで紙で出来ていたかのように、易々と碎け散った。

「……この力は一体？感触……まだ残ってる……」

巨大未確認のあちこちから爆発が起こる。その後、巨大未確認が爆発を起こして散っていった

S t ・ s ・ 1 5 とべ！ セイオウ

海鳴市、すでに辺りは夕日で赤く染まっていた。

先ほどの魔獣は、周りの物を食い散らかし、一回り大きくなっていた。

「グ…グガアアア…！！！」

巨大な叫び声が辺りにこだまする。

それにより、近くの駐車場の周囲にある建物のガラスがすべて吹き飛ぶ。

すでにほとんどの逃げられる人々はティードとフェルトたちによって別の場所へと避難していたが、その被害は尋常ではない。

「グガアア…！！」

ティード達の存在に気づき、魔獣が襲いかかる。腕を振り下ろそうとしたその時だった。

「シュランゲバイセン・アングリフツ…！！」

何かが魔獣に着弾した。

「な、何だ…？」

ティーダの前に立つのはエクセリオンに変身したレイジだった。

「・・・全開で叩く！」

エクセリオンは、刀身が鞭状になったリインブッカーを元に戻し、構える。

「いくぜ！ガンモードッ！！」

レイフオンをハーティアルローダーに接続、2つのツールのシステムが起動し始めた。

《Drive Ignition! Sturmfallen》

すると、銃口が光を放ち「矢」が生成され・・・同時に足元に焰が奔る。

「シュツルムファルケン、いけえッ！！」

声を同時に銃口に集まる光。光が銃口を包む。光の矢が放たれた。

魔獣は障壁を張るが・・・そのまま貫通して、爆炎が包み込む。

『ウボアアアアッ！！』

光の矢が炸裂し、魔獣は割れたガラスのように碎け散った。

あたりの爆炎が晴れたとき、魔獣達の姿は完全に消え、濁った宝石がのこっていた。

「倒した…のか？」

「う、うん…あれ、おわったのか？」

気絶していたホクトが目覚めた。

「平和な奴だな…。」

頭を押え、まだ本調子ではないようだ…とそれを見て呆れるエクスセリオンの姿があった。

「いや、まだだ！」

ティードは気づく、

『！？』

全員が振り返ると…それは、爆散した魔獣の破片は消えており、

代わりに……、

『……コワスゾオあああああ！！！！』

体長40メートル近くまで巨大化した……魔獣が。

突然の出来事に、ティードとホクトはただ呆然とするだけ。

しかし、エクセリオンは違う。

「……行くぜ……セイオウライガー！」

『ゴオオオオン！』

どこからともなく、やって来るライオンロボ『星桜』に乗り込む。

「うおおおおッ！」

セイオウは魔獣目掛けて飛びかかり、クローで右腕の肘から下を擦れ違いざまに切り裂く。

「ナメルナ！」

だが、こちらにも横腹に、魔獣の腹部から放たれる魔弾を浴びせられる。

「くっッ！」

セイオウは魔獣の方向に顔を向けて睨み付ける。そして体ごと向くと――

『ゴオオオオオオオ！！』

――大地が抉^{えぐ}られる程に力強く脚を踏みしめ、大音量の咆哮が放たれた。その叫び声の振動で木々は揺れ、アスファルトが僅かに跳ね、相手の魔獣は怯む。

「ーっ！」

「な、なんて威圧感なんだ……！」

怯むホクトとティード。

勢い良く大地を蹴って一直線に走り出す……そして。

エクセリオンがセイオウの速度を上げ魔獣へと突進する。

「ディバインシューター、シュート！」

セイオウはすれ違い様に、腹部の3連ショックキャノンを撃ちまくる！

バランスを失い、建物に衝突しそうになる魔獣だが、何とか体制を取り戻した。

『ゴオオオン！』

「もう終わりか？」と言っているように聞こえた。

『ググ…』

確かに、セイオウを攻撃する際に大量のエネルギーを使い、今の戦いでダメージを喰らった魔獣にもう勝機はない。

だが、攻撃をする気配の無いセイオウに、魔獣は逆転を賭け必殺技を放つ。

体を帯電させ、すべてを破壊する雷を発生させる攻撃を…

『クソオ！！ツブレロツ！！』

稲妻がセイオウに襲いかかる！

しかし…

「ライトニングプロテクション、展開！！」

セイオウのバリアを纏つての突進！攻防いつたいの技だ。それが相手の攻撃を押し戻した。

『ナンドト…！』

「いくぜっ！プロテクションスマッシュ！」

完全に意表を突かれた魔獣はシールドアタックごと自分の雷をまともに喰らった！

『ダハアアアアア！』

大きな爆発と共に粉々になる魔獣。

「やったか！・・・とにかく、また頼むぞセイオウ！」

『グオオオオン！』

おう！と言わんばかりに、セイオウは雄叫びを上げる。

——『???? ???? ??:??』

そこは荒れ果てた大地、濁った空、そして瘴気、黒い霧が世界に充滿していた…。そんな所に独りの紳士が立っていた。

紳士の容姿は肩まで伸びた黒髪に整った顔立ち、瞳の色は金。そして最大の特徴は両の目がオッドアイ。

「……、生体反応はあるか？」

『解かったよ、――。正面5キロ先に大型の生体反応がある、僕たちでかたづけよう!』

「ああ。」

陵桜学園

「いやぁ・・・終わった終わったぁ」

学校の校門から一人の生徒が居た

青い髪にてっぺんにちゃんと抜き出た「アホ毛」が目立つ背の小さい少女である

彼女は泉 こなた

此処陵桜学園に通う17歳の少女で現在高校2年生である

「にしても、今回の補習はきつかったな」

何故二人が此処に居るかと言うと実は言うと二人共補習を受けていたのだ

因みに今は午後5時位である

「こなちゃん」

「あ、つかさだ！」

ふと校舎側から声が聞こえたので二人は振り返った
そこには3人の少女が歩いてきていた。

紫の短髪に黄色いリボンをつけたおっとりした少女

同じく紫色の長髪を両端に束ねたツインテールのキツイ目つきの少女。

桜色の長髪にスタイルの良い美少女。

こなたの友人である柊　つかさ、柊　かがみ、高良　みゆきの3人である。

「何で？こんな時間まで居たの？」

「つかさが補習を受けてたから待ってただけよ」

そう言っただけでかがみは親指で妹つかさを指差した
それにつかさは頬を赤らめながら頭を掻く。

「ですが、予想以上に苦戦していらしくて・・・こんな時間まで
掛かってしまいました」

相当待っていたのだろうみゆきも多少やつれた顔をしていた。

「全く、そんなんじゃないんだこの後のテスト大丈夫なの？」

「あつあつ・・・」

かがみに痛い所を付かれたのかこなたは声を挙げる。

「その様子ですと・・・駄目そうですね」

みゆきが気の毒そうに言う。

視線の先にはこなたとつかさが真っ青な顔をしていた。

をれを見てかがみが溜息を吐く。

「普段から勉強してないからそうなるのよ」

「私は今やつてるネトゲがはまっちゃってさあ」

「教科書って見てると何だか眠くなっちゃっやうよねえ」

2人はそれぞれ言い訳とも思える発言をする。

「・・・あんたらは駄目だろそれは」

『はうううう』

こなた達がそう言う具合に会話をしていたその時・・・

ドーーーーーン！

突如轟音が響き渡った

そして振動が4人に襲い掛かる

「な、何！？」

「ちょ、ちよつと！何よ今の爆発は？」

「この爆発・・・かなり近いですよ」

「ああ、皆あれ見て！」

つかさは空を指差した

皆もつかさの指差した方を見る

「な、何なのあれ・・・」

ゴオオオオオオオオツ！

現れたのは巨大な炎の塊…しかし、それは、ただの炎の塊ではなかった。

真紅に燃え盛る炎の中で、重油のような黒くドロドロしたモノが存在し、炎の巨人形巨大未確認が上空から降りてきた巨大未確認は大地を蹴り、自慢の炎を浴びせんとする・・・が。

『え？』

真横から飛んできた桜色の砲撃が、巨大未確認を撃ち抜いた。

『大丈夫か！』

「だれ?!」

そこにいたのは、巨大なライオンロボだった。

陵桜学園から少し離れた場所…。そんな所に独りの少女が立っていた。

「…それでは参りましょうか。」

そう言ったあと少女はその場から消えた。

巨大未確認はセイオウの方を向き、新たな獲物として定めた。

「奴さん^{やつこ}、やる気マンマンって感じだよ…。」

「何言ってるのよ！あのサイズじゃあ規格外すぎるわよ？」

あーだこーだ言うこなたとかがみ

そう、セイオウよりも大型の巨大未確認相手に戦えるとは言えないのだ。

「ちよつとぐらいデカくたって、どーにでもなる。つー訳で頼んだぜ相棒！」

『グオオオオオオン！』

次の瞬間、巨大未確認は額から紫色の火炎砲を放った・・・が、それらがセイオウの身体に命中する直前に、その強靱な筋肉で大地を蹴り、宙に舞った。その高さは助走無しでは有り得ない高度まで到達した。

「な、何エエエ!？」

「なんて跳躍力なの!？」

かがみとこなたが驚きの声を上げ、放物線の頂点に到達したセイオウが落下を始める。

「デイベイイン…バスタアアア!」

セイオウは前半身胸部付近にある三連砲でデイベインバスターを放つ。

デイベインバスターを食らい巨大未確認はそのままバランスを崩し大地に倒れたが・・・その直後、体勢を立て直し、セイオウ目掛けて真っ向から突進を始めた。

「くっ、プロテクション!」

エクセリオンはとっさにセイオウの鬣のシールドを展開して、巨大未確認の突進を防ごうとする。

『グオオオオオ!!!』

セイオウのシールドに衝突する巨大未確認。プロテクションが巨大未確認を押し退けようと斥力を働かせるが、巨大未確認は断固として抵抗を続けながらプロテクションを破ろうと炎のかぎ爪を立て、プロテクションに食い込んでセイオウが押され始めた。

「しゃんなあろおおお!!」

だがエクセリオンの気合いも虚しくプロテクションは碎かれ、セイオウ目掛けて強烈なタックルが極まった。

「グアッ!」

セイオウは吹き飛ばされ、二回、三回と大地を跳ねて横転した。

『ゴオオオオオ!!』

「・・・なんてな、ドライブ・イン!!」

エクセリオンは操縦桿から手を離し、ハーティアルローダーを接続、地面に叩きつけられる瞬間に”セイオウグレート”に変形する。

「フォトンランサー、ファイア!」

セイオウは腰のライフルで合計千発を超えるフォトンランサー・フランクシフトを巨大未確認に向けて連続で放たれるが、それを最小限の動作でかわし続ける。

「ちいつ!?このッ!」

セイオウが右脚を振り上げた瞬間、

「ぐおッ！？ この距離でかよ！？」

距離を取った巨大未確認は炎の腕を飛ばし、セイオウを捕縛する。

「なっ！？」

セイオウを捕まえたまま、巨大未確認は回転を始めると、ジャイアントスイングの如くセイオウを振り回して投げ飛ばした。

「ぐああッ！！」

更に畳み掛ける様に、紫色の火炎砲の大雨が降り注ぐ。セイオウは満足な回避運動も取れず、殆どの光線が直撃してその場に倒れ込んだ。

「ちッ、どうすれば！？・・・ん？」

そんな時、回線が開く。

『レイジくん、レリッククロイドをつかうんや！！』

V社社長、八神一郎だ。

「八神さん！？レリッククロイド・・・これか？」

『キュクルー』

以前、彼の家に紛れ込んだ機械、フリードリッククロイドを取り出すと、足場のコンソールにセットする。

「フリードリヒリッククロイド！セット！！」

『キュクルー♪』

「ユニゾン・イン！！」

すると、セイオウグレートボディカラーが白銀に変わり・・・右手にバイザー形バスタークロウ、左手にヒートロッドが装備された。

「完成！セイオウフリード！」

白銀の装甲を纏うセイオウと巨大未確認は、決着を着けるべく、真っ向からぶつかり合う。

『オオオオオオ！！』

巨大未確認は拳を振るうがあまりダメージは受けない、バスタークロウの鋭い一撃は巨大未確認の肩をえぐり、装甲を砕いた。

「いくぜ！」

セイオウはヒートロッドの鞭状化した刀身をしならせ、巨大未確認の脚を絡めとる。巨大未確認はヒートロッドの軌道に一瞬戸惑い、ほんの少しだけ反応が鈍くなった。

『オオオオオオ！！』

「ぶった斬れ！飛竜・一閃！！」

エクセリオンの叫びと共にセイオウの前に九色の光が発生しバスタークローを構えながら突っ込み、そして巨大未確認を横に一刀両断していった。

『ヌグオオオオオオオーツ！！』

飛竜一閃を受けた巨大未確認は断末魔をあげながら砕け散っていった。

「お前って、凄いんだな？ これからも頼むぜ！」

『ゴオオオオオオン！！』

レイジの言葉に任せろ、と言わんばかりに咆哮したセイオウだった。

S t ・ s ・ 17 ジゲンノ向こう

――ヴォルケンリッター社

ここはヴォルケンリッター社の社長室。

「社長。お客様が参りました」

八神一郎の使いっぱしりの尾形は八神一郎に報告する。

「そうか…準備はできているね」

「はい」

八神一郎の元へとある者達がやってきた。

「やあ、一郎さん。」

「久しぶりやな！」

「失礼します」

と、ティータ

「待ってたで！」

「・・・貴方は八神一郎さん!!」

「覚えててくれたか？」

そんな会話をしていると、

「・・・そりゃあ、白衣、メガネの変人さんだもんな。」

「・・・」ハナ”君、出てきて説明してくれへんか?!”

八神一郎は怒りながら言う。

「…流石、前から普通じゃないと思ってたわ。」

ティードはソファーにすわり、隣に立って考え込んでいる”ハナ”
と呼ばれた人物に問いかける。

「折角だから、君たちの事を話したらどうかかな？」

「ええ、長くなるけどいいわね？」

魔女界。こことは別の次元にあり、女王と12人の元老によって統治されている異世界。女王は世襲制ではなく、前任者の指名または選挙によって決まるらしい。およそ1000年前までは地球と交流があったが現在は途絶えている。

「…ああ、知っている。」

「そうでしょうね。私が知っている限りでは、貴方と・・・あの、シャルル^こって少年は”次空管理局”がある”ミッドチルダ”出身なものね。」

「...その通りだ。」

ハナが問いかけると、ティーダは少し苛立たしげに呟くように答える。

「・・・そういや、人の名前を名乗ってるんやな？ハナやったか？」

「...ある”人間の少女”が”私の身内”に付けた名前を名乗っているだけよ。」

「ある人間？」

ティーダが聞くとハナが答える

「”ドレミ・ハルカゼ”・・・とか言ってたわね。」

「・・・？」

「あら？こんな時間。御免なさい、私は抜けるわ。」

そう言ってハナは、社長室から出て行った。

私立聖祥大学付属高校 1 - B 教室

レイジはいつもどおり机に突っ伏すと、完全に呆けてしまっていた。そんな彼の所にホクトが寄って来る。

「よっ！」

「レイジ君どうかしたのかい？」

もう一人レイジに声をかけたのはクラスメイトであり、もう一人の友人……

「よう！シャルル。」

中性的な顔立ちの金髪メガネ少年。シャルル・スクライアだ

「朝から考え事か？珍しいな……今日は雨でも降るんじゃないか？」

「お前が考え事をする方が珍しいと思うが……それより、ホクト。パラルワールドって知ってるか？」

「……知ってるけど、それがどうしたんだ？」

以前、ティードから聞いた話を2人に説明する。

『世界征服を企む悪の秘密結社？』

大きい痛みや悲しみを残していった史上最悪の連中。

世界征服を企む悪の秘密結社は強力な機械生命体、ガジェット、魔道生命体、怪人を作り出し、各世界に送り込み、世界が壊滅寸前だった……。

しかし、”英雄達”がそんな絶望的な状況を打破し、全宇宙の支配をたくらむ奴等は滅ぼされた。
だが、消え際に奴等が言った言葉。

『我々は人々の悪しき心と欲望の中に住む。それ故、皆が恐怖を抱く限り何度でも蘇える』

それはつまり、条件さえそろえば連中は復活する。

「……つて話をさ。」

「……”英雄”とか悪の秘密結社ってのは分かりやすいけど、ブッ飛んでるなあ……」

「ああ、俺も最初聞いたときにハチャメチャだつて、思ったよ……」

「……ハハハ。」

「あんた達、朝から何をやってんのよ？」

彼らの前にやってきた、わがままで直情的なツンデレそうな少女は

……

「ロツテ、おはよう」

「ん？お前か、おはよう」

「おはよう、3バカトリオ。」

彼らのクラスメイトの一人で、アリシアの親友「アスタロツテ・バニングス」だ
ぱつと見る……じっくり見ても○学生のような体型で、人形のように愛らしい可愛らしさがある

「ちょっと、あんた達。さっきから、あたしの事チビチビ言っ
てない？」

『言っていない！』

そんななか、ロツテが……あれ？そういえば……とぼやく。

「ロツテ、どうしたの？」

「うん、昨日職員室に見覚えのない生徒がいてね……………」

「へえ……………どんなやつだ？」

「えつと見た感じ……………あんた達と違って賢そうな子だったわよ」

「……………おい、詳しい話を聞かせろ」

レイジはいやな予感を察知した

「どうしたの？」

ホクトもどうした？と聞く。

「……悪い、なんか嫌な感じしてな……」

「……………それよりも女子の話しだ」

「あれ？どうして君が知らないの？」

「たしかに、お前が情報を知らないなんて変だな」

と、ここで。

「おはよう、レイジ君」

次に声を掛けたのは、クラスの中では女神ともいえる存在のアリシア・テストアロッサ

「おう、おはよう」

「遅かったわね、どうしたのアリシア？」

「ちょっと、職員室でようがあつて。」

「そうなの？もうすぐ、最初の授業が始まるわよ」

「え？もうか？」

時間を確認したら、もう始まる時間である……少し待つと……大人ののだが、とてもそうは見えない口り体型の担任の虹原いんく先生がやってくる。

「あれ、確かストラトス先生戻ってきたハズじゃ」……とホクトが言うと、

「ストラトス先生が別のクラスの担当になったため、私が代わりに担当することになりました」

「うおおおおおーッ！」

「騒がしいわよ、ヤロウドも!!」

とロツテは叫ぶ。

「皆さん、お静かに。今日は、転校生を紹介します」

転校生？とレイジは首をかしげる。

「巻機山さん、入ってください」

そういつて入ってきたのは噂通り女の子だった。

「（ガラガラ……）おはようございます」

「自己紹介を頼みます」

「はい、まきはたやまはな巻機山花です。よろしくおねがいます」

『『『うおおおおおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』』』

「静まりなさい！ヤロウ共！風穴開けるわよ！！」

やかましい男子達に吼えるロツテ。

「やれやれ．．．疲れるな、このクラス。」

私立聖祥大学付属高校 生徒会室

「……暇ね。」

生徒会室でアリシアは呟いた。

暇なのは毎度のことだが、それにもまして、窓からうつらかな太陽が差し込んでくると気持ちのいい風のせいで、いつもより眠気を抑えるのに必死だった。

「シャキッとしなさいよ、アリシア。仮にもアンタは生徒会長なんだから」

いつもよりかなりダレていたので、アスタロツテ・バニングスは思わず咎めていた。

「わかってるわロッテ、でもこう暖かいと眠くなっちゃうのよ」

アリシアはそう言って背伸びをした。

今日の生徒会室の日直は彼女たち2人。他の役員たちはどうせ非番なのをいいことに全員でどこかに出かけたりしているらしい。

たまには春の日差しに当たるのも悪くないかな、とロッテは思った。

「まあいいわね…」

独り言を言つて、ロッテはまた、読んでいた文庫本に目を落とす。

「…それよりアリシア」

「ん？」

「あんたいつも、レイジと話してるときやたら恥ずかしがってたよね〜（笑）ひょっとして…惚れてる？」

「ななななな！何言ってるのロッテ！そんなにや関係じゃにやくてですにえ！？」

アリサは顔を赤らめながら必死でロッテの言うことを否定するアリシア。

「ちょっとからかっただけよ。ほら、思いっきりてんばってるよ？」

「もー… ロッテってば…!」

「物好きね… アンタ、あの”不良”のどこに… って、なにあれ!？」

「れ、レイジ君!？」

ロッテが指を指した方向を見ると、レイジがハナと話していた。

「お前、”普通”じゃないな？」

「なんのこと？」

レイジの持っているレイフォンが彼女の”何か”に反応している。

「… ふふ、やっぱり劣化^{くさ}つても『高町なのは』の息子ね。」

「あ？今なんて？」

レイジは自分の母の名前が出て驚いた。

「…話を戻すわね…ん？」

『…は……れて…』

……え？なんだこの声？と思い、後ろを向くレイジ。

『……レイ……か……れてッ!』

まがまがしいオーラを出しながら、やって来るアリシアだった。

「レイジ君から離れてッ!!!!!」

鋭い形相で睨みつけ、こちらにやってくるアリシア。

「レイジ君から離れてッ!!!!!」

だがハナは動じず、アリシアに皮肉る。

「あら、妬いてるのあなた？」

「な……!?!?!」

何故かお互いバチバチと火花を散らす2人。

「……。」

「……。」

「一つ聞く。ハナ……お前、なんで母さんの事を？」

この状況でハナに質問するレイジ。

「・・・私が言っているのは”別次元”にいるもう一人の『高町なのは』。管理局の”エースオブエース”の事よ。」

「何言つてんだよ、なのはさんはどう見ても”一般人”それも主婦だぞ?!」

『……………』

「ふん、まあいいわ。これから話してあげる・・・私とあなたが戦うべき相手・・・」

ドゴオオオオオオオオン!!

刹那、二人の会話を遮るように爆発音が響き渡った。

(爆発?それも数ヶ所で、ほぼ同時にだと?)

「あら、もうここを嗅ぎ付けたみたいね・・・」

突然の爆発にレイジは腰掛けている廊下の手すりから立ち上がり、ハナは何が起きたのかを直ぐに悟る。

「・・・残念だけど、お話できるのはここまでのようね」

「・・・ああ?それは、どーいうことだ。」

首をかしげるレイジ

「どうやら、私たちにとっての“敵”がいらっしゃったみたい」

「俺たちの・・・敵・・・」

「まあ、気にしないで。近い将来”全世界”で大きな異変が起きるの・・・近いといってもすぐに起きる訳じゃないのよ。」

アリシアはハナを睨みつける。

（この子は…！？）

そしてハナは、真剣な表情でレイジを見据える。

「“真実”を知りたければ”偵都 ヨコハマ”へ来なさい。そこであなたが“戦う意味”を見出だすといいわ・・・さて、私は先にいつてくるわね。」

「待て！まだ、お前には聞きたいことが！」

ザアアアアアアアア！！

突如、空間が歪み、ハナはその歪みの中に姿を消した。

「……………つく！一体、何がどうなっている！」

ドゴオオオオオオオン！！

『！？』

再びの爆発音と共に建物全体が揺れ、天井から砂埃が落ちてくる。

「どうした？」

ホクトが呆けているレイジに聞くと、彼は我に返り……。

「……みんな、ここにいろ！俺、ちよつと行ってくる！」

そついうと彼は急いで外に出る。

「まてよー！」

「ええッ？！ちよ、ちよつとレイジ！？」

レイジは不吉な予感を感じ、慌ててその場を飛び出して行き、みんなが呼び止めるが、構わず走り、外へと向かって行った。

彼は携帯電話型ツールのエンターキーを押す……すると携帯が急に光りだす。

《sealing mode》

折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫ぶ！！

「セットアップ！」

《set up》

光輝く、フィンがレイジの周りを踊る。光が消え去ると、そこにいた彼はエクセリオンに姿は変る。

「さあ、纏めてかたづけてやる！」

魔獣たちの攻撃により荒れ狂ってしまった外。その激しさは増す一方で、辺りも地面が剥き出しの状態になってしまっていた。動きにくい地形なのにも係わらずエクセリオンは魔獣たちの攻撃を避けながら、距離を取る。

《Barrel Shot!!》

「バレルショット！」

エクセリオンは光弾を作り上げると、アクロバットしながら魔獣の
大群に向けて放つ。

『ギャアアアアアアア / % 〒@*ツ!!!?』

「ハアアッ!」

倒し損ねた魔獣が襲い掛かるが・・・エクセリオンはカウンターで
殴りつけ、怯んだ所に蹴りをたたきこみ、魔獣からは濁った宝石が
ばらまかれる……

「ギイイイ!」

—ジジジジイ……パリイイイイインッ！—

「悪いけど……片付けさせてもらっぜ。」

エクセリオンはリンブッカー^{ブッカー}を魔道書モードに変形させ、魔獣に向ける。

《P h o t o n B u r s t ! ! 》

「はああああ……たああっ！」

助走をつけて上空に跳び上がり・爆撃が発され、さらに別方向にいる魔獣にも放たれた。

《D i v i n e S h o o t e r F u l l P o w e r ! 》

「・・・霧がねえ！デイベインシューター！！」

リンブッカーをガンモードにし、エネルギーを収束させ・・・光弾を放つ。

―ドシュウウウウウウウツ…………ズバババババババアツ！！―

「ガアアアアアアアアアアツ！！」

リンブッカーから強い光りが矢の如く放たれ、魔獣達へとその光りが突き刺さると、魔獣達は声にならないような断末魔をあげながらひび割れていき、濁った宝石となって散っていったのであった。

—— 偵都ヨコハマ

様々な美術品が各地に展示された日本の大都市。
まさに美術品に囲まれたこの街は、邪な欲望を抱いた悪しき心の持ち主達の格好の街である。

「あなたが盗んだ宝石を返してください！！」

ピンクの髪の少女…ミルキイホームズのリーダー的存在 シャーロツク・シェリンフォードがそう叫ぶと濃い紫色の髪で、身長は高い方。ファーの着いた灰色のコートとズボンを着て、右手には形状のメカニカルな杖を撞いている青年が答える。

「あのねえ、これは”宝石”なんて安いものじゃないんだ。元々、僕たちの世界にある”ロストロギア”なんだよ？」

「ろすと？なにそれ？」

茶髪の少女 譲崎ネロは質問する。

「答える必要はないよ。」

紫色の髪の青年は地面に宝石を放り込むと。徐々に光の粒子が集まり一つの形を形成していく。

そこに現れたのは、まるでトカゲのような生き物(?)だった。

「……………!？」

その奇妙な怪物を見て、金髪の少女…コーデリア・グラウカと隣にいた黒髪の少女 エルキユール・バートンはそれぞれ驚きの表情を浮かべ……。

「ひ…なにあれ!なんのトイズ？」

そして次の瞬間、トカゲの右腕が鞭のように伸び彼女達に襲ってきた。

「キャアアアアアア！」

無意味と判つてても、身を庇うように伏せるミルキイホームズの少女たち。

万事休す…と誰もが感じたその時だった。

《Divine Buster》

謎の音声とともに放たれたエネルギーによって奇妙な怪物はぐらつき、バランスを崩す。

「大丈夫か？」

「!？ 新しい怪盗? 「助けてやっ」といて怪盗はないだろ?」……すいません。」

『何?この人…?』

突如現れた、謎の仮面戦士は彼女たちの無事を確認すると、未確認の前に立つ。

「君い・・・随分無茶苦茶な事してくれるじゃないか？」

青年は謎の仮面戦士を睨む。

「無茶苦茶はどっちだよ・・・少し、頭冷やそうか？」

―ヒュンツ……ズガガガガガガガガガアッ！―

そんな時、2人の元に突然無数の氷弾が降り注ぎ、二人はそれを間一髪で避ける、突然の出来事に謎の仮面戦士は驚き、氷弾が降ってきた方向を見上げると、其処には青年がこちらを見下しており、そしてそのまま此方へと向かって来るのであった。

「危ないだろ！？」

「ッ！？誰だッ！！？」

「ごめんごめん、」

謎の仮面戦士は警戒心を露にしつつ、不審な人物に問うた。青年はそれを気にも留めずに答えた。

「だれだ・・・だつて？ハハ、名乗る必要はないよ！」

まるでタメ口を聞く様な、そんな軽い口調だった。にも拘らず、青年の全身から闇と言つ姿で噴き出している様な錯覚すら感じた。

その頃…ホームズ探偵学園

「アンリエットさん…これは…？」

学園をまとめる生徒達のトップ。生徒会長アンリエットに青年が見せられた映像…それは最近、海鳴市周辺に現れる魔獣だった。

「ご覧の通り、偵都ヨコハマにも、未確認が出現しています…」

「アンリエットさん、あなたはなぜ僕にこれを？」

「小林さん、あなた達も未確認と戦つてほしいのです」

「え…、僕達が…ですか？」

「ええ。以前ミルキイホームズと共にこれまで何度も、怪盗を倒しヨコハマを救った小林さんなら、今回の未確認と戦えると思っています」

「それは、もちろん彼女たちも一緒ってことですよネ？」

「はい。ミルキイホームズにも未確認と戦ってもらいます。もしかしたらトイズが”アレ”に通用するかもしれません」

「……………」

「……ちっ、なんて奴等だ」

「…ふん、その程度だったみたいだね？」

謎の仮面戦士が戦っている中、ミルキイホームズ達は瓦礫の陰に隠

れていた。

「どうする……？アイツら中々強いよ……」

「ねえみんな、あの”仮面怪盗”さんを助けてあげよう……！」

このシャロの言葉を聞いてネロは。

「待つて！なんで助けなきゃいけないの？！」

「その、私達も助けてもらったから。」

「……しょうがない、やろう！」

コクンと頷いたシャロ達は立ち上がって2手に別れ、形状がメカニカルな杖を撞いている青年達の前に姿を現し、もう一方は忍び足で後ろへ回り込んだ。

「なんだお前ら、まだいたのか」

メカニカルな杖を撞いている青年の一人が鼻で笑う。謎の仮面戦士は叫ぶ。

「来るな！危ないだろ……！」

「わざわざやられに来たのか？まあ別に構わん。俺は戦えればそれでいい」

もう一人の青年が静かにそう言う。

「あ……あなた達！何が目的なの！？」

「君達に過ぎたおもちゃを回収しに來ただけだよ。」

「それを邪魔したから、お見舞いしただけさッ……！」

エリーは近くにあったタンクに手を掛けると……

「え……え————い——！」

それを軽々と引き抜き、そのまま青年に投げた。

青年は奥歯を噛み締める。

「小賢しい！」

そう叫んだ青年は、剣を両手で握り締めながらエリーに飛びかかった。

「はあああああ！」

ガキンツ！

「サンキュー、お蔭でこいつの隙が出来た」

謎の仮面戦士は、青年の剣を受け止めた。

「フフフ！」

だが青年は静かに笑っていた。

謎の仮面戦士の後ろでは、杖を構えるもう一人の青年の姿があった。

「ルフトメッサー……」

ザッ……！

「えいつ！」

「……しまっ……」

だが一瞬の隙をつき、シャロが近くにあったワイヤーの束に念を送ると、ワイヤーが自我を持つように独り手に地面を張り進み、青年の身体を拘束し、瓦礫に身体を打ちつけた。

「うっ……くそっ……邪魔しやがって！」

青年はワイヤーを解き、自分の邪魔をしたミルキイホームズ達に対し、刃を抜こうとするが、三人目の青年が彼の肩に手を置いた。

「な、なんだよ！？」「その位にしておけ。お前の”それ”はここで使うと危険だ！……俺達も巻き添えをくう。」くっ……。」「

「……その通りだ！」

3人はそう言い、その場から飛び去ろうとする。

「チツ、命拾いしたな…！」

青年は納得していないようだが、ほかの2人と同様に去っていった。

「ふー、大丈夫か・・・お前ら？」

謎の仮面戦士が振り返り、呆然とした様子でミルキィホームズが彼の姿を眺めている。

「……」

「あつと…この姿じゃ、わからないか？」

気まずい空気を何とかするために、謎の仮面戦士は変身を解く。

「……あつ！？翠屋のお兄さん！！！？」「」「」

「……おう。」

謎の仮面戦士の正体は彼女達がよく食事をしにいく翠屋の息子「高町レイジ」だった。

S t · s · 1 9 N u r s e r y R h y m e

金髪の綺麗な女性とメイド服の女性が話している。

「起きましたか。どうですか？」

「はい、陛下…殿下は問題ありません。」

金髪の綺麗な女性がゆりかごを覗き込んでいた。

「ふふ、おとなしい子なのね、」

「あの方も喜びましょう。警護の方はどうなっていますか？」

「3名が部屋の外に、屋敷ないに6名、私を含めて総勢10名です。連中にもばれてないと思われます。」

この赤子は敵対国の国王同士の子供だが、派閥の中には友好を結ぶ気もない連中が多い。だから、密かに匿われて育てられていた。

「陛下、お時間です。」

「分かりました。では、元気でシャルティエ……………」

額に口づけし、金髪の綺麗な女性は寂しそうな表情で去って行った。

この女性は現在、他国との戦争を起こさないように行動している。

それから、更に二年

成長した赤子・・・シャルティエは護衛から魔法、魔法制御、防御、射撃、肉体強化、斬撃、高速移動、幻術などの使い方を教わった。護衛の人達からも、学問を教え込まれた。殿下とか関係無く・・・厳しく英才教育を施されている。

稽古の帰りし際に銀髪の男性が優しげな眼差しでこちらを見つめてくる。

「父様、いらしていたのですか。」

シャルティエを抱き上げた。

「・・・大きくなったな・・・シャル。」

片手で軽く頭をなでられ、こんな感じに両親は結構来てくれるし、ちゃんと会話してくれる。

それから、一年後。

紛争や内戦が始まっていた。

戦争の激化…それにより、どうしようもなく…少年、シャルティエを逃がすことになった。

「いいですね、私達の教えたことをわすれないで…なにがあっても生き延びて、あなたが目覚めた世界が平和なことを祈っています。」

特殊な呪を掛けられ、コールドスリープの装置にいられた。そしてそのまま、他世界への転移させられる。

「待つて、……母様まつて、……かあさま!？」

「んああ…、はッ!!……夢か…？」

目を覚ましてベッドから起き上がる。身体は汗びっしょりだった。

「!?!? ……そうか、思い出した。……僕は?!？」

目を覚ますと…シャルル・スクライアは全てを思い出す…彼は顔に手を当て…。

海鳴市警察署

休憩室でシャルルはティーダと話をしていた。

「シャルル君・・・君の話は本当か？」

「はい。僕は、聖王オリヴィエと覇王インクヴァルトの一人息子。敵対国の国王同士の子供だったんです。」

ティーダは先ほどから、ボールペンをカチカチやっている。

「もしそれが、本当なら・・・。」

「ええ、生きてませんよね・・・僕の家族は。でも、今はスクライアの皆・・・それにレイジ君達が僕の家族ですから。」

「そうか・・・。」

シャルルの言葉にニコッと笑う・・・そんな時だった。

此处、海鳴市警察署で警報が喧しく鳴り響く。

「何事だ！」

「け、警部！大変です・・・突然、未確認が現れたんです」

女性の言葉にティードは眉を顰める

「何？気づかなかったのか？」

「それが・・・突然現れたんです！まるでいきなり現れたかの様に」

「何だと・・・はっ、まさか・・・」

「はい、魔獣じゃないんです！まったく別の。」

ティードは青ざめてモニターを見た・・・

揺らぐ陽炎の向こう…紅蓮の照り返しを身に受ける、大柄の女性の姿が8つ…タイトなボディースーツに身を包み、大きなバイザーで顔を完全に隠したその姿は、彼がミッドにいたとき何度も映像で見た。

「間違いない・・・あれは指定犯罪者『マリアージュ』だ！」

「…僕が、行きます！！」

シャルルは元々持っていた簡易デバイスを持ち、

「待ちなさい！シャルル君！」

シャルルは海鳴市警察署を出て、市街地に向かう。

ドガアン！！

と爆音が響き、窓ガラスや壁が吹き飛ぶ。それと同時に悲鳴を上げながら人々が逃げる。

「!？」

シャルルはその人々が逃げてきた方を向くと、8体のマリアージュ・
・その後ろからも複数の動体反応がある

「アクセルシューター、シュート！」

シャルルが魔法を放った。だが、マリアージュは攻撃を避けようとせずに右拳を固め、魔法を弾く。

「く…ッ」

バイザー越しに見える、無表情な瞳が彼の姿を捉え、相手の腕が形を崩した

肘から先が変形し、次の瞬間には両腕は細身の刃へと変わっている

だが、シャルルは怯まず、一番手近なマリアージュに接近した

カウンター気味に突き出されてきた右腕の刃を身を捻って避け、

「ッ!？だったら！ブレイクインパルス！」

ガキンツと音が鳴った、そして、左腕の刃は杖型デバイスの一撃で叩き折る

碎け飛んでくる刃を距離を取って避ける。

（囲まれたらシュートだけじゃ捌ききれない、フィールドを再調整してくる時間なんて無い・・・くっ！！）

マリアージュはシャルルのデバイスを左手で掴み、彼ごと瓦礫の方へ投げ飛ばした。

（しまった！？）

同時刻、

その頃、ヴォルケンリッター社では・・・最新機器を紛失したと大騒ぎになっていた。

「^{ヴィース}V・Sセラー」を無くしたやて！？」

「はい。すみません！」

ヴォルケンリッター社、社長八神一郎は”V・Sセラー”なる機器の入っていたトランクを調べる。

（いや違うな、適応者が現れたんや。）

海鳴市、市街地。

マリアージュは瓦礫にシャルルを投げると同時、右腕を漆黒の槍に変化させ、

（・・・やられる！？）

・・・が突然現れた光が、突き込まれてきた槍の一撃を阻止させると、

（なんだ……………？）

彼を離れた場所に転移させ、その光は彼の手に収まる

「これは、レイフォン？・・・いや違う、よく見るとターン式だ。」

シャルルの手にあるのは、ヴォルケンリッター社で紛失したはずの、最新機器だった。

ピピ…

「やっぱり、君が適応者か…シャルル君。」

「八神さん！？」

シャルルはマリアージュの攻撃をプロテクションで防ぎながら、ハ神一郎の話を聞く。

「その“v・sセルラー”に古代ベルカ文字を入力して、セツトアップするんや！」

「ちょっと！まっ……《ツーツー……》切れた？」

途中で通信が切れてしまう。

「使っしかないのかな……？」

彼は携帯電話型トランスジェネレーター『v・sセルラー』をターンさせ、コードを入力する。

「武装形態！」

《Get Set》

光が満ち、シャルルが右が紫と左が青色の複眼、翠色のスーツと銀色の装甲に包まれた戦士“アステイオン”へと変身を遂げる。

「変わった！？」

——次元戦士アステイオン……1ミリ秒で、武装形態を完了……では、武装形態プロセスをもう1度見てみよう……」

「武装形態！」

《Get Set》

——”V・sセルラー”の増幅システムにスパーク。増幅された粒子エネルギーが……ソラーメタルに変換され、シャルルが武装形態。“次元戦士アステイオン”に変わる……

マリアージュがアステイオン目掛けて襲いかかってくる。

「やるしかない！たああっ！」

戸惑いながらもアステイオンが反射的に拳を繰り出す。

拳を受けたマリアージュがひるむ。

変身したこの姿での攻撃はマリアージュに通用する——そう直感したか、アステイオンが無我夢中でマリアージュに攻撃を加える。

拳前面をプロテクションで覆い、反撃の拳打を顔面に叩き込む

「プロテクションスマッシュ！」

美しい能面の様な顔を隠すバイザーを叩き割り、炸裂した一撃でマリアージュは吹き飛び、爆発する。

『Protection』

攻撃を防壁で防ぎながら、アステイオンは素早く距離を取る。2体

潰したが、後続が合流してきたらしい。相対するは12体のマリアージュ

恐らくはまだ増えるであろう敵手の姿を睨みながら、アステイオンは身構え、考える

こいつらは、決して強敵ではない。

だが、自分はこの状況を打破することができるのだろうか？

「・・・弱気になんて、なつてられない！行くよ！」

背中を守る逃げる人の為、そんな言葉で己を鼓舞し、アステイオンは躍り掛かってきたマリアージュを迎え撃つ

絶対に負けない —— そんな強い決意を、漲らせて反撃に転じたアステイオンの、常人を遥かに超えた攻撃が、次第にマリアージュを追い詰めてゆく。

アステイオンのキックでマリアージュとの間合いが開く。

彼は構える。地球の格闘技でもミッド、ベルカのアーツでも無い……まったく異なる型。

相手目掛けてアステイオンが突進。

（…父様、力を貸して！）

「…カイザーアーツ、霸王…断空拳……！」

——『霸王断空拳』…力を込めた必殺の一撃が、炸裂。

吹っ飛ばされ、マリアージュの動きが止まり崩れ落ちると同時、爆発する。

「これが……アステイオン……!？」

複眼に投影された文字を見て、荒れた町の中の鏡に佇む自分を呆然と見つめ、呟く。

S t · s · 2 0 大地 駆ける超人

七森中学校に通う中学生の少女たち。

「さあ、諸君！行こう！！」

「結衣ちゃんいきなり言われても」

しばらく行くと一件の喫茶店があった。

落ち着いた雰囲気その店。

「みんなー、ここにしようぜ！」

きつとその喫茶店のどこか不思議な雰囲気に惹かれたのだろう。

「賛成です・・・いきましよう、結衣先輩。」

店に入ることに少しも抵抗がなかった。

「入るよー」

ゆっくりと扉を開けば、カランカランと心地よい音でドアベルが鳴る。

店の中はこざつぱりとした雰囲気に包まれていた。

少女達は一歩足を進めると・・・

「いらっしゃい」

「いらっしゃいませ」

とカウンターから声がかかる。

「ご注文は何になさいますか？」

少女はカウンター席に座りながら店員に言った。

「・・・じゃあラムレーズンたくさん食いたい!!」

「私はアイスクリーム」

店員は少し苦笑して・・・。

「わかりました。では少々おまちください。」

注文が終わると、少女達が

「そういえば、また都内で、人が襲われたんでしょ？多いね、最近。」

「コワイ。」

女の子たちの話の中に…一人の少女が口を出した。

「でも、『仮面の戦士』がやっつけたみたいだよ。」

店員の食器を洗う手が止まる。

「なにそれ？『魔女っ子みらくるん』みたいなの？」

店員がこける。

「違っって有名だよ！ちまたをにぎわしている正義の味方！実は、次元の彼方からやってきたってウワサが……」

「ふうん、そんなのが現れたの——もう、世紀末ね。」

「そうよ、この所、変な事件が続出してるもんね。」

「ご馳走様でしたー」

カランカラン……。

「だってよ、レイジ。」

「五月蠅い。」

レイジはからかってくるホクトに言い、食器を洗い終わると、腰掛ける。

「確か、さっきの子達は七森中学校の「倶楽部」の子達よね？」

「そういえば、最近いろんな部活動があるよね？「けいおん部」とか、「黒科学部」・・・とか。」

アリシアとシャルルが部活動の話に切り替えると、

「！　そっだ。俺たちも作ろうぜ！「正義の味方部」ってのを・・・」

『却下！』

「なんだよ、皆して！」

と一斉に却下される。

一方、とある街中。

——怪獣が出現しております。こちらでは先ほど牙や爪のある怪物が駆け巡り、ビルの窓を破る被害が出ております

”謎の移動要塞”が建物を次々と破壊していく。

『進め！破壊しろ！木一本残すな！！人間一人生かすな！！』

そこで謎の爆発が起き、民間人は逃げる。

さらに今度は地鳴りが響き、壁が破られ、謎の武器がビルを破壊する。

今まさに人々の目の前に怪物が迫るとき――

だがそこへ何かの気配を感じ、怪物が振り向く。

彼方からゆつくりと歩いてくる異形の人影。

その姿は、白い肢体。胸部の所に金属パーツが装飾。腰には本の形をしたツール。羽飾りのついた仮面、青いレッグには赤いライン。

謎の戦士に怪人が襲い掛かる。

だがその戦士はその攻撃を交わし、怪人と戦いを繰り広げる。

生身の人間とは対照的に、怪人の攻撃は戦士に全く通用しない。

それどころか、戦士の繰り出すパンチやキックが、圧倒的な攻撃力で次々に怪人に炸裂する。

呆然とその戦いぶりを見つめる人々。

「下がってろ！」

《GUN mode》

戦士は怪人の攻撃にひるまず前に突き進む。

《B a r r e l S h o t 》

戦士の凄まじい銃撃に魔獣は抵抗出来ずに後退していく。

戦士が怪人目掛けて突進し、その体が宙に舞う。

《S w o r d m o d e 》

「・・・紫電一閃!!」

強烈な一刀が怪人に炸裂。

怪人は苦痛の断末魔をあげながら砕け散っていった。

『ぐおオオオオオオーツ!!』

大爆発――

怪人を見事撃破した戦士の姿を呆然と見つめる人々。

未知の敵をたった1人で葬ったその勇姿は、まさにあの”仮面戦士”である。

St · s · 21 Einladen 招かれざる客たち

翠屋

着信音に気づいたレイジはレイフオンを取り出し、

「アリシアか・・・。」

ソファに座って操作するとアリシアにかける。

『レイジ君?』

「もしもし、どうした?」

電話でテンパってることにレイジはつつこまず・・・

『う、うん...、あのね、レイジ君。明日って暇かな?』

「ああ、空いてるよ。それがどうかしたか?」

『そ、そのね、福引きでウォーターワールド...プール施設のペアチケットが当たって、良かったら一緒に行かない?』

...

「マジか？俺10回中、9回引いて…全部ポケットティッシュだったぞ？…一枚食事券。」

.....

.....

.....

数時間前、アリシアは商店街で買い物を終えて歩いていた。そこに声が聞こえる。

「ざんねーん、ハズレです。はい、残念賞のティッシュだ。」

福引きをやっていた。そこで、アリシアは思い出し、ポケットに手を入れる。

「えっと、確かここに…、あった！」

彼女はポケットから福引き券をだした。そして、賞品を見る。一等は10万円分の商品券、二等は5万円分の商品券、三等はウォーターワールド…プール施設のペアチケット、四等はお食事券、五等は図書券2枚、あとは残念賞のティッシュである。

「すみません、やります!」

「お、可愛い子ちゃんだね!んじゃ福引き券は2枚だから、2回回してくれ。」

そう言われ、アリシアはおみくじを回す…すると、

―プール・ゲート前―

ウォーターワールドに着いたレイジは……ホクト達とゲート前で会う。

・・・

「とーちゃーく!あつ! レイジ君。シャワーはちゃんと浴びな

いとダメだよ」

「なんで、お前らがいるんだ？ホクトにシャルル。」

2人はヘラヘラしながら……

「細かいなあレイジは…早く入ろっぜ？」

「じゃあ着替えたら看板の前に集合だね。」

「仕切るな……って…もういねえ…」

レイジはため息をつき……

「まあ…行けば判るってことか……」

—

レイジ達は着替えてるときに気付いた、ロッカールームは かなり広いのに殆ど鍵がかかっていなかった。それに、着替えているとプールの方から“キャーキャー”と黄色い声が聞こえ、此処のプールは他に比べて静かなもの。

「これは確かに穴場だな」

………

………

……

「遅いわよ！高町。」

更衣を済ませたレイジ達は看板を探していたら看板より先にアリシアを見つけた・・・彼女だけでなく、クラスメイトのアスタロツテ・バニングスと巻機山花^{まきはたやまはな}までいた。

「…なんで君たちまで？」

「おお、お前ら結構スタイル良いな！」

アリシアは黒。ハナは薄い緑でパレオを巻き、ロツテは薄いピンク色の水着。

「バニングスは除いて…あべしっ！」

ホクトの顔面にロツテの蹴りがグレート激烈アタック！

「アンタねえ・・・風穴開けるわよ♪」

ロツテは顔は素敵笑顔なのだが、拳を硬く握り、プルプルと震わせている。

「ごめんなさい」

怖い…危険を感じたら直ぐに鎮火。

「……なあ、レイジ。我らが聖祥大高のぴちぴちマーメイド達をみてどう思う？」

「俺に質問するな。」

彼がどっかの赤い戦士みたいなセリフを言うとシャルルは……。

「照れてるんだよ、彼は……睨まないでよ。」

レイジに睨まれ怯む。

「っっ……俺は泳いでくる。」

アリシアの水着姿を長時間見ていられなり、レイジはすぐ近くのプールに飛び込んで逃げる体勢に入ろうとするが、

「待って……」

と言いながら、彼はしっかりと腕に思いっきり抱き着かれてしまった。レイジをアリシアが引っ張っていく。

（……／／／）

——一方、ホクト&シャルルは——

「シャルル……腹へったな？」

「そうだね……何か食べに行こうか？」

「おう！」

「やっぱりこのラムレーズンは見た目から素敵だ〜」

以前、翠屋に来ていた少女”京子”が盛られたラムレーズンのアイス（驚異の五個、コーンもデカい）を見て感激していた。

同じ倶楽部のあかりも呆れ半分で自分のアイス（二段。”京子”以外のアイスは普通だが”京子”のは重ねていない、盛られている）を買い、近くのベンチに腰かけてアイスで乾杯

他の倶楽部の子達が普通に食べるのに対して、”京子”は一口で一個ずつ食べる。もちろんお決まりの『キーン』に見舞われる。

【海鳴市 ウォーターワールド近く】 p.m. 12:18。

「海鳴市のウォーターワールド付近で、魔獣が巨大な蜘蛛の巣を張っております！」

駆けつけた警官たちが見上げる中、建物と建物の間に巨大な蜘蛛の巣が張られている。

突如、巣から舞い降りた蜘蛛状の魔獣たちが警官たちを襲い始める。

『ザザザア！』

警官たちが発砲するが、銃弾は魔獣の体に軽くめり込んだだけで、コロコロと転がり落ちる。

魔獣の吐いた糸が、パトカーの窓ガラスを突き破り、車内の警官に絡みつく。

【海鳴市 ウォーターワールド内】

突然、ゲートを突き破って飛び込んでくるパトカー。

事切れている車内の警官を尻目に、車内から魔獣が現れ、ウォーターワールド内にいる人達を襲い始める。

「きゃあッ！」

悲鳴を上げるアリシア。蜘蛛状の魔獣が糸を変形させた槍で突き刺すように飛び出す

レイジは無防備なアリシアを抱え左へ飛び、回避する

「ギギギィ！」

警官たちが魔獣に挑むが、到底通用せず、次々に警官が襲われている。

「アリシア、隠れてろ！」

「レイジ君！？」

——レイジは手に召還された、レイフォンのエンターキーをおす。

《sealing mode》

折りたたみ、赤い部分に手をかざして叫んだ！！

「セットアップ！」

《set up》

そう言った時、魔獣が襲い掛かる。

「ちっ！」

隣の流れるプールへ吹っ飛ぶレイジ。なおも追って来る魔獣。

「やああ——っっ——！」

襲い掛かろうとする魔獣目掛け、レイジが拳を突き出す。

パンチが魔獣に命中する瞬間——その腕が光輝く、フィンが彼の周りを踊り、瞬時に白い甲冑に包まれる。

「！？ 高町？なによあれ！？」

逃げていたロツテは息を切らしつつ、彼の肉体の変貌に目を見張る。

無我夢中でレイジが、魔獣目掛けてパンチやキックを繰り出す。

体が光を発し、そして目を開けられないほどの輝きを発生し…腕同様に、脚、胴、そして頭と、全身が次々に甲冑に覆われる。

「あれが、彼の力よ。」

ハナは答える。レイジが変身を遂げたその姿こそ、戦士“エクセリオン”である。

魔獣が襲い掛かる。エクセリオンが槍を軽やかな動きで回避し、リインブッカード魔獣に切りつけ、建物の壁に叩きつける。

「きしゃああ！」

全く応えていない様子の魔獣、口から吐いた糸でエクセリオンを絡め、壁面へ叩きつける。

—カン、カン、カン—

とつさにエクセリオンがウォータースライダーの壁面を昇り、屋上へと辿り着く。

一飛びで屋上に飛び乗った魔獣が、尚もエクセリオンと戦う。

「わわッ！？」

魔獣の爪がエクセリオンに迫り、その腕がエクセリオンを屋上から

落とす前に、放りだされそうになる。

そして滑り出した。曲がる・・・落ちる・・・

突然出現した段差によって飛び出しながら落下するその時、

「パイロシューター・・・。」

その言葉と共に、少女の周りに32個のシューターが展開され、その内の半数を魔獣に向けて放ち、はるか数十メートルは先にある壁に叩きつけた！

「ハナ、お前あぶねえだろツ?!」

ハナが魔法を放つが、魔獣には効果は今一つのようなだ。

魔獣が獲物をハナに変えたか、彼女目掛けて魔獣の爪が迫る。

「危ないッ!」心配には及ばないわ!」あ?」

彼女はもう一度展開したシューター群の半数を放ち、残った半数を4等分にしそれぞれを1つに集め・・・

「ディザスターヒート!!」

4条の閃光を魔獣に放つ。

「グエエ！」

「・・・私では威力はこの程度。今のをやってみなさい、エクセリオン！」

どうやら、ハナはこの術技の手本を見せたつもりらしい。

「簡単に言ってくれるな・・・」

エクセリオンはリインブッカーをガンモードに切り替え、

「・・・全開！」

レイフオンをハーティアルローダーに接続、2つのツールのシステムが起動し始めた。

《Drive Ignition! DISASTER Hea
t!!!》

仕上げと言わんばかりに、エクセリオンはリインブッカーの先端にプログラムを組み込んだ何かを込めた力を収束させて…

「シュート!!」

魔獣に向け放つ…当然、そんな物耐えられるはずも無い。

あえなく魔獣は砕け散り、濁った宝石を落とす。

「・・・ふう。」

ロストロギアを回収し、変身を解除するとアリシアが此方にやってくる。

「大丈夫か？怪我とか・・・」レイジ君、帰ったら魔法教えてあげる！」なんだよ、いきなり！？」

「・・・やれやれ。」

どうやら、先ほどの様子を見ていたらしい。

「ヒーローごっこしてる場合じゃないわね。」

「原因は君でしょ、ハナさん？」

????? ?? ??????

― 奴等が、動き出す前に…―

― そう、奴等が…―

どこかの空間で何者かが言い、その場から消える。

S t ・ s ・ 2 2 霸王だアツ！

エクセリオンの戦いを茂みで見ていた青年に近づいて来た仮面の男

「主がお呼びだ。付いてこい」

仮面の男は青年の手前で止まり、

「……………」

「私に話す時はしっかりと敬意を持って、いいな？」

仮面の男の言葉に奥歯を噛み締めた

「……………はい」

彼は仮面の男の返事を聞いてから歩き、その後を付いていった。

数日後

午後、翠屋。

カラン、カラン

ホクトとシャルル、アリシアとロッテが翠屋を訪れ、レイジが四人を迎えた。

「あ、みんなきたか！」

4人は広い机のほうに座った。

「アリシア、このあいだ。ありがとな！」

「うん。」

レイジはある程度の術技を彼女に教えてもらった。

話していると、旅行から帰って来たレイジの母「なのは」が茶化してくる。

「…んふふ、何があつたのかな？」

「…母さんには関係ないだろ…。。」

ホクトが余計なことを言う前に彼が制する。

「っだよ、隠すことないだろ？」

そんなやり取りをしていると、ロツテは・・・

「ところで、アンタの「あれ」一体何なの？」

「……ここで聞かない約束だろ？」

「ごめん。」

レイジは翠屋のエプロンを着て皿洗いをしながら、彼女を少し睨む。

「ところでみんな、今日は食べていくのか？」

レイジは水の入ったコップをみんなの前に置いた

「当たり前だろ。」

4人は窓側に置いてあったメニュー表を真剣な面持ちで見っていた

「そっいえばレイジ。お前に言いたいことがあるんだが」

「何だ？ホクト」

「やっぱ、ヒーローつつたら”必殺バズーカ”だよな？」

「ッ……」

ホクトの質問に3人は口をコップに付けたまま固まってしまった。

「アンタ、オタ過ぎよ……それ。」

「何だよ。いいだろ？」

レイジが皿洗いを終わると、ティーダがやってきた。

「大変だ、レイジ君！」

4人が振り向くと、息切れしていることに気づく。

「落ち着いてください。はい、水。」

「すまない……ングング……っは、未確認だ。」

水を受け取り、飲み干すと答える。

「！？　っていうか、電話で言えればいいのに……」それが通信が繋がらなくてね」？　それで。」

「相手は『雷獣型』の魔獣だね。車も動けなくなってこうして……」

『え…?』

ティードに言われて彼らがテレビを見る。その内容は…

『ザザ・・・海鳴市の山頂から雷雨が発生し、ザザ・・・現在もそれが広がっています。ザザ・・・これは天候とかではなく、ザザ・・・先程この山頂を調査する為に登った警察隊も連絡は途絶えてしまい、ザザ・・・中の様子も気になります。ザザ・・・』

「ほらね……」

ホクトが画面をよく見て仰天する。

画面に映ったのは――。

「おお!?! 本当だ・・・レイジ、シャルル!」

「うっん、あれは僕がやるよ。」

シャルルの言葉にホクトは、

「おいおい、なにエ「レイジ君はここに残らないと」!?!? っそうか。」

シャルルはそう答えると、海鳴市の山頂へと向かって行つた。

『雷獣型』の魔獣が海鳴市の山頂で暴れ回る。

逃げ惑う警察隊。

『この世を究極の闇が覆い尽くす！…ん？』

雷獣が違和感を感じ、その方向を見ると、既に“V・Sセルラー”を構えながら歩み寄ってくるシャルルがいた。

『…お前は何者だ？』

「…知らないよ」

『どうやらお互い、この世界にはいてはならない存在らしいな』

彼の脳裏に、父クラウドの言葉が蘇る。

——人はどうしようもなく無能だ、お互いが争いながら永遠に生きてゆく。これ即ち人の宿命なのだ。悪が滅べば善も滅び、善が残れば悪もまた残る。全ては虚しい戦いなのだ

「そうだね……すべては繰り返される……自分の平知を守るために、人は永久に戦い続けるんだ……」

父の言葉を噛み締めるシャルル。

シャルルは黙って雷獣の言葉を聞きながら携帯電話型トランスジェネレーター『V・Sセルラー』をターンさせ、コードを入力する。

「武装形態！」

《Get Set》

光が満ち、シャルルが右が紫と左が青色の複眼、翠色のスーツと銀色の装甲に包まれた戦士”アステイオン”へと変身を遂げる。

「さあ、いくよ！」

アステイオンはそう言うのと雷獣に向かって走りだし一発、また一発と雷獣を殴っていき追い詰めていった。

「フツ！ハツ！セヤツ！」

―ドゴオツ！バキツ！ズガアアツ！―

『ウグオツ？！お、おのれえ！』

雷撃を放つ雷獣・・・だが、アステイオンは両手の拳を解いて、開手の状態で翡翠色の魔法陣を展開させる。

「甘い！」

雷獣は右腕をアステイオンに突き出す。電気を帯びた鋭い爪が生えている

アステイオンは瞬時に防御するが突き出された電気を帯びた爪に切り裂かれ、後方へと吹き飛ばされた。

「このっ！！」

アスティオンは飛び出し雷獣に近づくと

「絶招炎雷炮！！！」

強靱な足での蹴り、絶招炎雷炮を繰り出すがそれは軽々と避けられ、後ろに回り込み

「……………クッ！」

大きく足を上げアスティオンの頭に電気を帯びた足を当てようとするが、かわして雷獣を殴り飛ばそうとするが軽やかなステップでその拳から逃れる

『やるではないか……。』

「黙ってよ。面倒だからこれでさっさと終わらしてあげるよ。」

思い切り大地を蹴り、甲冑の力で強化された脚力が凄まじいスピードを生み出す。

超低空飛行をしながら、ところどころで何度か大地を蹴る。

先程の戦法の比ではない速さで突っ込み、拳を……突き出

ギンッ

せなかった。

「フン、正面から来たら簡単に防げ……」「これでいいんだ！」

何！？」

… 対するアステイオンは、一撃を綺麗にガードした雷獣に怖気付くことなく、ガードされた状態から、拳を滑らせることで硬直から抜け出し、雷獣の頭上を宙返りして背後に回った。

その動きを目で追っているがかなりの速度だ。アステイオンは雷獣の背後に着地し、右手を軸にするために地面に付き、間髪入れずに足払いを掛ける。

『ぬるいわ！』

が、それを読んでおり、アステイオンを視界に入れるように体をターンさせつつ、足払いを躲す。

『生半可な攻撃は通用しない。それと先ほどの衝撃は伝わったが、傷までは付けなかったな・・・終わりにしよう。』

「クッ」

そう呟いた雷獣は突如消える。

「！？」

アステイオンが驚愕すると、

「……………がはっ！」

雷獣は目に見えない速さで、アステイオンは吹き飛ばされてしまう。

拳の威力が相当に強く、受けたアステイオンは高く飛んでいく。

岩場に叩きつけられる。雷獣は逃さず、高く飛び上がって、両手を握り、容赦なく胸に拳を叩き込む。

「うあっ！」

岩にめり込んでしまうほど、叩きつけられたアステイオン。

『貴様あ……くたばれ!!』

電気を帯びた鋭い爪で、アステイオンに切りかかる。

「ッのっ！」

アステイオンは爪をかわし、その爪を叩き落とす……そして、

「振動拳——!!」

『グ、グオオオオオ……ッ!!』

振動拳が炸裂。すると、雷獣の身体に亀裂が入ってき、ところどころが崩れ始めてきた。

劣勢と見えて退却を始めるが、アステイオンは逃さない。

「ハアアアアア……霸王流破城槌ッ!!」

「グアアアアーーーー！！！！！」

ードオオンッー

アスティオンの最後の一打を受け、雷獣はつなり声をあげながら粉々に砕け、爆発し紫色の爆煙を上げながら消滅する。

アスティオンもそれを確認すると変身を解き、シャルルに戻ると『V・S セルラー』でレイジに電話をかける。

『…大丈夫か？』

「うん。そっちは？」

『…ああ、ザコがこつち来たが、全部片付けた。』

「わかったよ。じゃあ、切るね」

連絡が終わると彼は翠屋へと向かった。

海鳴市内の廃工場付近

廃工場付近の空き地にて、エクセリオンが魔獣と対峙していた。
グレムリン型の魔獣。そこそこ強い魔獣だ。

「なんだ？コイツキモいな……」

ホクトがそう呟いた時、グレムリン型の魔獣が攻撃を放った。

「ケ〜！ ケツケツケツケ〜！」

「おわっ、危ねえ！」

グレムリンの攻撃は地面に直撃して辺りに砂が飛び散り、煙幕の役割を果たした。

「クソッ！ さっきの奴の攻撃は“これ”が狙いだっただのか？！」

なんと砂煙の中をくぐり抜け、背を向けているエクセリオンを襲う。

「……マズい、衝撃弾かッ！」

その瞬間を待っていたかのようにグレムリンは大量の白い球体を飛ばす。慌てて、動きを止めるが既に時遅し。無数の衝撃弾が彼を襲う。

バシユシュッ!!

「ケキヤケキヤケキヤ……」

最初の衝撃弾がエクセリオンの正面で爆発する……更に次の白い弾。再び爆発。息をつく暇もなく次の衝撃弾がやって来る。

「レイジッ!!」

すぐさま彼に駆け寄ろうとするが……ティードはそれを制する。

「待ちなさい。」

やがて砂煙がはれ、攻撃態勢に入ったエクセリオンの姿が確認できた。

「ケケケケッ……クアッ!」

拳を握り締め、グレムリンはエクセリオンに殴りかかった。

パシッ!!

——だが彼は容易くそれを受け止める。ラインブッカーの銃口をグレムリンに向ける。……

「シルバーハンマー！」

それによってグレムリンの体はコンクリートの地面に倒れこむが・
・未だにヨロヨロと歩いている。

「あまり面倒な事はしたくないんでな。さっさと終わらせる！」

『ッ！？』

「烈風一迅！れっふういちじん！」

エクセリオンはリンブッカーをソードモードにしてグレムリンに横一閃の斬撃を放った。突然の攻撃にグレムリンは防御出来ず、ただ黙って斬撃を受けていった。

『グ…キヤア…ッ！！？！』

グレムリンは断末魔の悲鳴をあげながらガラスのように砕けていった。

『見つけたよ。この世界のイレギュラー！』

その光景を影で見ていた少年が近づいてくる。

「未確認生命体……？じゃ、ないな。」

『姿形は、まあ借り物さ。僕が誰かは、すぐにわかる。』

エクセリオンも影で見えていた青年に気づき、リンブッカーをブツクモードに戻して腰に収める。

「君のデータと力を手に入れて、僕は飛ぶ…この身のうちに、”僕らの主”を再び蘇らせ、決して砕けぬ、真の王となるためにねッ！」

「お前…」

その時、空中に黒い空間が現れ、魔物が召喚される。飛び出して来たのは巨大な怪鳥。奇声を発しながら空中を飛び回る。2メートル近くもある巨大な翼。獲物を狙う鋭い目。口からチラつかせる牙。

「キャパパパパ！」

『僕の名は——…さあ、我が剣の前に君は死ね！！』

青年は名乗ったが、怪鳥の奇声のせいでうまく聞き取れなかった。

「来い！」

魔獣はグルグル空中を旋回していたかと思うと突然、高度を下げ、エクセリオンの真正面から突っ込んで来る。見えるのは黄色く不気味な歯と赤い舌。魔獣は口を開け、突っ込んできていた。

エクセリオンは即座に横に飛ぶ。振り向きながら銃を構え、

「ファントムブレイザー、ファイアー！」

……ドドドド……

これで攻撃は回避……出来なかった。魔獣の翼は2メートルもある。その翼と正面衝突し、その衝撃でエクセリオンは吹っ飛ばされる。

「グッ!!」

吹っ飛ばされた体は地面に落ち、背中を強打する。翼に当たった胴と床に強打した背中が痛む。

一方、魔獣は空中に舞い上がり再び旋回していた。が、

「……まだだ、シューティングシルエット！」

エクセリオンは三人に増えそれぞれ魔獣を翻弄しながら近づき攻撃をしていく。

それがさらに分かれて四人、それまた分かれて八人になった。

『ハアッ!』

そのまま八人がかりで撃つわ蹴るわ、ヒーローとは思えない闘い方を
する。

「エグッ!？」

さらに追い討ちをかけるように、

「紫電一閃!!」

魔獣を斬り付けた。

「ぎゃああああ!!」

魔獣はたまらず爆発した。

「さ、まだやるか?」「…今日は此处までか…」? ちよつ、までよ
!」

青年がそう言うと、辺りの景色が歪み彼は歪みと共に消えてしまっ
た。エクセリオンも変身するとき、疲れて座り込む。

「なんだっ たんだあいつ…?」

「そうだな、訳がわからないぜ。」

こうして、謎の敵との戦い挑むレイジ達であった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0955x/>

次元戦士エクセリオン

2011年10月27日11時16分発行